

筑波大学 社会国際学群 国際総合学類

卒業論文

文化本質主義の検証から見る日本人留学生

2012 年 1 月

氏名：永田 洋

学籍番号：200819007

指導教員：関根 久雄

目 次

第1章 序論	1
1. 問題設定	1
2. 研究方法	5
第2章 文化本質主義の検証	6
1. 思想の移り変わり	6
2. 「多」文化主義から多「文化」主義への疑問	10
3. 現代の若者における文化本質主義の実態	12
4. 文化本質主義の可能性	19
第3章 日本という文化	20
1. ステレオタイプの日本文化	20
2. 実証的な研究に基づく日本文化	25
第4章 異なる条件下での日本人の特性の実態	31
1. アンケート内容と対象	31
2. 非多文化条件下における日本人	31
3. 多文化条件下における日本人	34
4. 状況の力	37
第5章 結論	39
1. 文化本質主義のとらえ方	39
2. 日本人留学生とは	40
3. 課題	40
参考文献	47
英文サマリー	51
謝辞	53

図 目 次

図 1：集団主義と個人主義の分布[高野 2008:290]	27
図 2：正確測定結果[筆者調べによる]	33
図 3：各類型における英語能力[筆者調べによる]	36
図 4：各類型における「留学先で本当の自分が出せているか」の結果[筆者調べによる]	36

表 目 次

表 1：ゴードンの同化過程モデル	7
表 2：各エスニシティに対する共通認識について	13

第1章 序論

1. 問題設定

どの土地にも文化は実在し、人々の暮らしやアイデンティティはその土地や彼らの出身地の文化の影響を色濃く反映している。隣接する国々など海外から見れば非常に類似している土地も、現地住民にとっては全く異なる2つの国に見える。たとえばドイツとオーストリアはともにドイツ語が公用語であり、街並みもそっくりである。しかしオーストリア人はドイツ人として間違えられることを非常に嫌うし、広く知られている「まじめで時間には正確」というドイツ人の気質は、日本人駐在員の話からもオーストリア人とは結び付かない。世界規模でみる文化は国家単位で、国内規模でみる文化は州や県、エスニシティ単位でとらえられ、その土地に住む、またはその土地出身の人間の気質を想像させる。このようなステレオタイプの文化評価は1980年代以前に主流であった同化主義、文化多元主義、多文化主義を含む文化本質主義の考えであり[馬淵 2002:60]、以降、現在にかけて文化本質主義は批判されてきた。アンダーソンは印刷資本主義を掲げ、印刷された言語によって同質的な空間を共有するネーション（国家）は、想像の共同体であり、創造されたものであると批判している[アンダーソン 1983:159]。さらにエスニシティについても、ローゼンズは各地域グループに属するとの概念は一般化された外部の存在さえあればよい[ローゼンズ 1994:83]と述べ、文化本質主義を否定している。しかし、このように学説的には反文化本質主義が主流になっているにもかかわらず、ステレオタイプの文化評価は実際には不可避なものであり、日本文化やイギリス文化、中国文化などの各国地域の文化の実在感は否定できない。

文化本質主義とは「文化」を本質的に定義しようとする思想である。本研究では、本質主義とは、アリストテレス的本質主義とする。アリストテレス的本質主義とは、歴史的に基礎づけられた、自己理解に基づく経験的な本質主義であり、つまり物事の本質は書く時代の思想の潮流にも代表されるような主観的な視点である[ヌスバウム 1992:208]。そして文化本質主義とはつまり、先に述べたような文化に対するステレオタイプ的見解をとるものである。たとえば、著者の調査ではアメリカ人は一般的に日本人からは「おおらか、大雑把、陽気」とであるという結果が出ているが、これがま

さに文化をその本質で理解している、つまり文化本質主義なのである。

筆者は2010年9月から2011年8月までイギリスに留学し、そこで数回学生主体によるチャリティ・イベントの運営を行った。メンバーは日本に関連したイベントであったため、スタッフ・メンバーの中のアジア系は日本人のみで、そのほかにイギリス人、その他ポーランド人やオランダ人など様々な文化背景を持つ学生であった。ボランティア活動に限らず、チームワークが前提とされるさまざまな多文化的状況における活動では、「自分」、特に文化的文脈における自分のアイデンティティが強調される。チームでの活動は個々のアプローチの仕方によってチームが一丸となって働く場合もあれば、それぞれが独立して活動する場合もあるが、一つの共通の達成すべき目標が存在することによって、自分の考え、習慣、モットー、アプローチの方法等を含む個々の道筋が容易に他者と比較可能となる。イベントの運営中、日本人スタッフのみのグループで意見を交わすこともあれば、日本人とヨーロッパ人が交じったグループ、さらに筆者以外全員がヨーロッパ人であるときもあった。その中で感じたことは、他者との関係において本質主義的な文化意識は存在するが、表出される文化的特徴は状況によって変化するということである。これは、個人のアイデンティティは国家や文化的背景のみによって生成されるのではなく、大小さまざまな文化や意識、価値観の差異によって獲得されるものであることを示唆する。つまり異種混雑性こそが個を確立させているのである。筆者の観察では、差異によって表面化する個人の特徴の変化は、とくに日本人において顕著であった。日本という国は他国と比べ、日本人が国内において外国人と交流する頻度はきわめて少なく、そのような社会は「ひた文化的状況」と呼ぶことができる。そして彼ら日本人の特徴の変化は、意識的もしくは無意識的にしろ、世界の多くの国にとってはむしろ特異とされる日本国内で一般的な「非多文化的状況」[NHK放送文化研究所 2010:104]から抜け出し、多文化状況下に身を置くことによって生じる大きな差異から、新たな価値観を彼らの中で創造しているからではないだろうか。その様な彼らは既存の日本人のステレオタイプに必ずしも当てはまることはない。

経済協力開発機構（OECD）の統計によると、海外で学ぶ日本人留学生数は1986年ごろから1999年までの間に飛躍的に増加し、2008年の統計ではその数は6万7,000人に達した。ピーク時の2004年における8万3,000人からは多少の減少傾向にあるものの、高い数値を保っていた。そのうちの3万8,000人近くは欧米諸国への留学で

あった[文部科学省 2010:1]。旧文部省は 1988 年以降海外留学生数を公表しているが、日本人留学生のパーソナリティ、アイデンティティにかかわる先行研究は 2000 年ごろまであまりされていなかった。さらにその中でもほとんどの研究は日本人留学生の精神問題や適応問題に注目したものである。たとえば横田は、日本人留学生のパーソナリティの変化は「回帰型」、「持続型」、「帰国後変化型」の 3 種類に分けられるという[横田 1997:15]。「回帰型」は留学中に起こったパーソナリティの変化が帰国後元に戻るものである。「持続型」は変化したパーソナリティが帰国後も持続するものであり、「帰国後変化型」は留学中に変化は見られないが、帰国後変化するというものである。パーソナリティの変化はアイデンティティの変化を調査する上で重要である。しかし、横田の研究ではそれ以上には言及されていない。末広は日本人留学生のアイデンティティの変化の特徴やその社会的意義などに注目している。彼女によると、日本人留学生は「能動的アイデンティティ型」、「受動的アイデンティティ型」、「モラトリアム型」の 3 つに分けられ、それらは日本人留学生の変容過程の特徴を表すという[末広 2006:155]。横田と末広の研究はこのように変化に着目したものであるが、日本人の具体的な特徴の変化、個人の性格や対人における関係の仕方の変化には言及していない。本論文ではこのいまだ取り扱われていない「日本人留学生における文化の差異により表出する対人関係におけるコミュニケーションの変化」を明らかにすることを目的とする。

本論文では「日本人」という言葉を多用する。単に「日本人」という場合、その言葉が示す対象は広い。日本人の血筋の両親を持ち、日本で生まれ育った人は日本人であるし、海外で育った日系の人たちも日本人と定義できるのではないだろうか。さらに日本に帰化した人も日本人と呼べるし、在日と付く外国人も日本人と呼べるのではないだろうか。しかし、本論文では非多文化状況下から多文化状況下へ移る日本人の特徴をとらえることを目的とするため、比較的容易にその特徴の変化を見いだせる「日本で生まれ育った日本人血筋の両親を持つ日本国籍の人」と限定する。さらに第 4 章で議論する日本人の特徴の変化については、日本で生まれ育ち、高校もしくは大学で海外に半年以上の留学または移り住んだ若者に限定する。

本論文ではまず文化本質主義を再考し、日本文化を例に、はたして本質主義が批判されるべきなのかを検討する。そのうえで、非多文化的状況下から多文化的状況下へ移ることで表出される日本人の特徴の変化を見出し、あえて本質主義の視点から見た

日本人の気質とはどういうものか検討する。

「文化」はこれまでに多くの定義付けをされてきた。たとえばタイラーは、文化とは「ある社会の一員として学んだ能力のすべて」であると定義し[タイラー 1871:8]、文化の大枠を説明している。クラックホーンはさらに詳細に文化を定義し、「人工的に作られたものが具体化したものであり、人間集団の達成を構成し、象徴によって習得、かつ伝わってきた規範や行動」[クラックホーン 1952:154]であるとしている。「人工的につくられたものの具体化」とは人間が村や町、国家等集団意識を持つうえで欠かすことのできない構成員で共有する「何か」、つまり意図されて作られた共通意識、または共通の媒体の具体化である。1992年にはダーセンが「ある一つの集団に属している人たちが単に共有している生き方」[ダーセン 1992:224]と、簡潔に文化を定義しているが、これは推測し得るにある文化の定義をすべて包括できるような定義である。マツモトはこれらの定義をまとめる形で、次のように述べている。

各規則におけるダイナミック（活動的な）システムであり、明確なものや暗黙のうちに了解されているものがある。各集団が自らの生存のために作り上げてきたシステムで、態度、価値観、信条、規範、行動などに関連している。集団内で共有されているが、同じ集団内でもその中に存在する各单位ごとに異なった解釈がされている場合もある。次世代へと伝えられていき、比較的变化しにくいものではあるが、時代とともに変化する可能性もある[マツモト 2001:26,27]。

文化とは動的なものであり、また文化には明確な境界線がない。しかしそれは人々の中で暗黙の了解として理解されているのである。共有のレベルにおいても、その境界は明確ではなく、単位は家族単位から国家単位、エスニシティ単位へと広げることでも可能である。この論文では「日本人」に焦点をあてることから、文化を国家単位でとらえる。そして先述したマツモトの定義を要約し、特別指定しない限り、文化とは「集団内で共有される価値観、意識であり、集団とは国家単位のものである」とする。

単に「日本人」という場合、その言葉が示す対象は広い。日本人の血筋の両親を持ち、日本で生まれ育った人は日本人であるし、海外で育った日系の人たちも日本人と定義できるのではないだろうか。さらに日本に帰化した人も日本人と呼べるし、在日

と付く外国人も日本人と呼べるのではないだろうか。しかし、本論文では非多文化状況下から多文化状況下へ移る日本人の特徴をとらえることを目的とするため、比較的容易にその特徴の変化を見いだせる「日本で生まれ育った日本人血筋の両親を持つ日本国籍の人」と限定する。さらに第 4 章で議論する日本人の特徴の変化については、日本で生まれ育ち、高校もしくは大学で海外に半年以上の留学または移り住んだ若者に限定する。

2. 研究方法

本論文では文献、学術論文、インターネット等を参考に文化本質主義批判について再考する。その後アンケートを作成、実施し、日本人の特性についての議論の参考資料とする。アンケートの対象者は主に海外に半年以上の生活経験を持つ、20 歳前後の日本人とする。第 2 章では「文化」概念についての議論を、多文化共生が注目された初期の概念とされる同化主義の時代から現在の反文化本質主義まで歴史の流れに沿って概観する。そこから文化本質主義の再考へ議論を進める。第 3 章ではルース・ベネディクトの描いた日本人像から現在の実証的な日本人像の研究にかけて、一般的に語られる日本人とは一体どういうものなのかを議論する。第 4 章ではアンケートにより現在の若者における文化本質主義的意識を調査し、第 2 章で紹介した文化本質主義批判の妥当性を議論する。最後に、第 4 章ではアンケート調査から日本人留学生のアイデンティティの変容を調査する。

第2章 文化本質主義の検証

1. 思想の移り変わり

本章の目的は文化に対する意見や世論の変容の歴史と実際のアンケートを比較し、文化本質主義を再考することである。まず本節では文化本質主義の意味がいかにして構築されたのか、思想の変遷に注目して考察する。そして本章の後半では、アンケートにより文化本質主義が根付いているかを検証する。そこから、文化本質主義から日本人留学生の特性を探ることの意義について考えたい。

文化を理解するための思想的アプローチは、いつの時代においても確立されたものはない。思想の流れはいくつもの見解が混じり合って形成されているため、時代ごとの思想アプローチを定義することは不可能である[馬淵 2002:45]。しかし、時代ごとに主流となるような思想の大まかな流れは存在する。文化に関する思想でいえば同化主義アプローチに始まり、文化多元主義、多文化主義、そしてその後多文化主義批判が現れ、現在では多文化の「多」に対する疑問から「文化」の在り方についての疑問へと移っている。現在では文化を見るのではなく人間個々の特性を重要視する見方が強く、文化を個人の特性としてとらえることは間違っているという見方がある。以下でははじめにこれらの思想の流れを具体的に見ておこう。

同化主義アプローチ(assimilationism)は現代の合理主義や資本主義の見方に類似している。これは「拡散・消滅型アプローチ」や「単線的理論アプローチ」とも呼ばれ[関根 1989:60]、社会の権力構造におけるマイノリティの人種や文化がマジョリティに溶け込んでいく過程を表している。同化主義とは「工業化や近代化は人々の価値・規範を一定の方向に収斂させるとともに、人々の持つ属性主義を薄め、その結果、人々は同化しやすくなる」[関根 1989:60]ものであり、つまり、マイノリティは徐々にその原型をなくし、核となる強者に淘汰・吸収されることを意味する。マイノリティ文化は非合理的な文化とみなされ、マジョリティ文化に同化していく。表1はゴードンが示した同化の過程モデルであり[ゴードン 2000:67]、段階別での具体的な同化の内容を表している。

同化の内容	同化段階の名称	別称
ホスト社会の文化への適応を開始する	文化的・行動的同化	文化変容
ホスト社会のクリーク、クラブそして諸制度へ、一時的関係レベルで大量適応する。族外婚が大量に起きる。	構造的同化・婚姻的同化	融合
ホスト社会の一員としての感情の発達が始まる。	自己同定的同化	
偏見の消滅。	態度受容的同化	
差別の消滅。	行動受容的同化	
価値・権力的葛藤の消滅	公民的同化	

表 1：ゴードンの同化過程モデル[Gordon 2000:67]

同化をタイを例に取りあげてみる。いわゆるタイ人は大まかにタイ族と華人系に分けることができる。実際には、タイの民族構成はさらに細分化されるのだが、華人系以外の民族を外見で見分けることは困難である。タイ国内、とくに首都バンコクではいわゆるタイ人とされるすべての民族は、各民族固有の言語を使用する者もいるが、主なコミュニケーション言語はタイ語であり、宗教もほぼ全員が仏教徒である。タイにおけるマジョリティ文化はタイ族の文化である。このようにマイノリティ文化は実際に存在してはいるが、それらは「タイ」という国を中心にマジョリティ文化に同化しているのである。ゴードンの同化過程モデルに照らし合わせると、この事例は最下段の公民的同化に相当する。しかし、このように同化は不可避であるにもかかわらず、同化主義だけではすべての事象を説明することができない。たとえば民族間の紛争である。民族間の紛争は主にマイノリティ文化や民族が権力や独立を求めて起こるものである。マイノリティは必ずしも同化せず、むしろ反発する可能性もあるため、同化主義的アプローチは常に有効というわけではない。

人々の統合に注目した同化主義アプローチの反論として、文化多元主義的アプローチ(cultural pluralism)がある[カレン 2007:3]。同化主義の視点では、社会の多様性は国家の統一を脅かすものとされ、批判の対象であった。しかし、文化多元主義は逆にその多様性を強みとし、保持していく考えである。サラダボウルと揶揄される文化多元主義は、さまざまな文化が一つの器の中でまとまることにより、お互いの強みを引き立てあい社会を構築していることを指す[松尾 2007:38]。しかし、文化多元主義は同化主義とちがい、価値観の融合や変容を認めるものではなく、さまざまな人種がただ単に共生している状態を指す傾向がある。アメリカでは 1960 年代に起こった差別

撲滅を目的とする公民権運動の時に文化多元主義という思想が主流となり、現在の「メルティングポット」とはまた異なる、「人種のサラダボウル」と頻繁にたとえられた。文化多元主義には2つの異なる見解が存在する。第一に統一性を重視する見方、リベラルな多元主義である[馬淵 2002:48]。馬淵は「多様性は社会の統一性を損なわない限りにおいて尊重」[馬淵 2002:48]されると述べる。リベラルな多元主義は「平等な尊重」を求めるものでもある[松本 2002:22]。文化がマジョリティであるか、それともマイノリティであるかは問題視せず、政府は平等に処遇しなければならないと主張する。つまり、いかに多くの文化が共生していようと国家を形成する主な文化や人種の中心性は変わらず、その国家における中心的文化は支配集団ととらえることができ、現実的には支配集団とマイノリティ集団の力関係が変わることはないという見方である。第二に、統一性よりも多様性を重視する見方、コーポレイト多元主義である[馬淵 2002:49]。ニエトラが提唱したコーポレイト多元主義は、实际的に不平等である文化間の関係を、マイノリティ集団に特別な社会的権利を与えることによって解消しようとする考えである。しかし、コーポレイト多元主義は、「マイノリティ集団がそれぞれ独自の政治的圧力をかけ始め、国が分裂してしまう危険がある」[ニエト 1992:198]と指摘された。さらにこれら2つの見方は、どのようにさまざまな文化がその独自性を保ちながら共存できるか具体的に提示できていないため、1980年代後半から多文化主義が文化多元主義に代わり叫ばれるようになるのである。

多文化主義はその主張の違いから前期と後期に分けることができる。前期の主張はコーポレイト多元主義の延長であるとされている[馬淵 2002:49]。マイノリティ文化に対し明確な権限を与えることではないにしても、多文化教育に見られるようなマイノリティ文化の尊重や理解の必要性が主張される。しかし、文化多元主義と異なる点は、1つの主流な文化や核となる文化を基盤とする社会を受け入れるのではなく、異なる文化を等しく平等なものとして受け入れ、政治的にも経済的にも同じ力関係をもったうえで共存するという主張である。そのため松元は「ある場合には文化という集合的属性に基づいて人々を別異に処遇することが正当化されうる」[松元 2007:24]し、「文化の維持・繁栄といった生の目標について政府が積極的に関与すべきである」[松元 2007:24]と述べている。多文化主義の表れは、教育の面でも多文化教育として取り入れられてきた。多文化教育は多くの先進国の小中学校で取り入れられているが、それらは必ずしも同等の内容を目指しているわけではなく、地域のエスニシティに合わ

せて体系づけられている。たとえば、松尾の研究によると、アメリカの6州が「文化スタイルや言語など、文化的な多様性に対応する学習によりマイノリティ集団の子供たちの学力向上を促す『特別な教育を必要とする子どもたちならびに文化的に多様な子供の教育アプローチ』[松尾 2007:140]をとっており、その他の州は別の視点からのアプローチ¹をしている。この上述した教育アプローチは前期の多文化主義アプローチに沿った形で行われているものであり、これらの主張やアプローチは後期の多文化主義者から批判されている。

前期の多文化主義に対する批判には、同化主義やリベラル派からの意見、そして多文化主義自体への疑問の3つがある。はじめに、「多文化主義は社会共通のアイデンティティを攻撃し、統一を脅かす」[馬淵 2002:50]という同化主義的意見である。これはインドとパキスタン为例にあげることができる。インドとパキスタンは宗教が異なり、インドは主にヒンドゥー教、パキスタンはイスラム国である。パキスタンは1947年にインドから宗教を理由に独立した国家である。インドは現在でも政教分離を貫いているにもかかわらず、その自由思想からヒンドゥーに危機感を抱いたインドイスラム連盟がムスリムを統合し、独立した。この事例からは多文化主義は国家の分裂を助長する思想として解釈することができる。次に、リベラル派による反差別要求と国家中立性要求である[松元 2007:24]。松元はフランス・ケベック州の法律を例に挙げ、反差別要求と国家中立性要求について説明している[松元 2007:24]。フランスは憲法第15条に「すべて個人は、法の前および法の下に平等であり、とりわけ、人種、民族もしくはエスニックの出自、肌の色、宗教、性別、年齢または精神的もしくは肉体的障害により差別されることなく、法の平等保護および利益を受ける権利を有する」[樋口・吉田 2001:94]ことを記載している。しかしケベック州では、50人以上の従業員を有する企業はフランス語化計画により彼らが使用する広報媒体等においてフランス語の普及に努めなければならない、また英語による初等教育を受けたことのない父母を持つフランス系の児童はフランス語で運営される学校に通わなければならない。これはさらにケベック州は公然とフランス語を推進し、それはフランス文化における善き生を送るために有利に働くとしている。つまり多文化主義において、マイノリティ文化の価値の無差別化の動きはあるものの、自文化を社会の中心に据えているため、多文化主義は反差別と国家中立性において正当性を持っていないということである。

¹ そのほかのアプローチとして「多文化教育アプローチ」、「人間関係アプローチ」、「多文化的小および社会改造主義的教育アプローチ」がある。[松尾 2007:141]

さらに、ラヴィッチは上記のような多文化教育に対し「高い目標を目指して懸命に努力すれば人種、民族、ジェンダーは障害にならないと示すことは、教育の大切な目標だ」[ラヴィッチ 1997:34]と述べ、教育におけるマイノリティ文化集団に対する特別措置等を批判している。戴はマイノリティ文化集団に対する特別措置はマイノリティの地位向上の機会を逆に制限してしまい、また、マイノリティ集団に劣等感を与えてしまうと述べている[戴 1999:50]。

以上は、文化を本質的にとらえ、文化は実在するという前提で議論された内容である。次節では、後期の多文化主義、多文化の「多」への疑問から「文化」に対する疑問へ推移した後の議論を紹介する。

2. 「多」文化主義から多「文化」主義への疑問

前節で述べた前期の多文化主義までの文化に対するアプローチは、文化の本質の実在を前提とし、量的にアプローチしているものである。しかし、その後多文化主義は、文化の本質の実在を疑問に掲げる議論によって、文化自体の捉え方、文化とは一体何なのかという議論を中心に展開される。

1969年にはバルトにより境界主義が提唱された。彼は民族問題に注目しながら文化論を展開している。彼は、民族問題を検討する際には、それぞれの集団の特徴ではなく、集団メンバーが内集団と外集団を主観的に区別する動的な境界過程を分析することこそが重要であると述べている[バルト 1969:48]。彼のこの主張から、文化とは個々が独自の存在として実在するのではなく、他文化との接触において生じる相違点に注目することによって分析することができるもの、とすることができる。アンダーソンは、「文化とは人工的なものであり、それは政治的なものである」と述べている[アンダーソン 1983:205]。つまりそれは、文化は印刷された言語によって同質的な空間を共有するネーションであり、それは創造されたものであるという主張である。例えば、「日本人」とは日本語日本文化を日本語によって共有できるものであり、日本語を使う民族である。そしてその「日本語」とは創造されたものであり、「日本人」とはその言語を使うがゆえに枠にはめ込まれた国家によるイメージなのである。そしてその印刷資本主義の目的は言語によって統合された想像上の国家の形成である。彼は、このように文化とは意図的に作られた人工物であるとし、文化の実在を否定している。酒井も、文化はナショナリティに象徴されることを前提とし、そのナショナリティは近

代の最先端を行くような国家では脱構築されなければならないと述べ、文化の存在を否定する[酒井 1996:14]。近代社会は資本主義が思想の中心であり、競争社会において文化や価値は均質化していく。その中で文化の存在は輪郭が非常に曖昧であり、文化を定義することは困難である。酒井はその動的な文化、ナショナリティは既存のものから徹底的に見直すべきだと提唱している。

ローゼンスはバルトの議論に似ているものの、さらに簡略化させた文化集団の見方を示している。ある集団に属する人々が自集団へ帰属意識を得るには、その集団の特徴よりも一般化された外部の存在が必要である[ローゼンス 1994:83]。同じ集団の内部者でも、個々の特徴は類似点よりも相違点の方が顕著であり、そのような状況の中で複数の者（ときには何千人）からなる集団内で国籍などの書類上の規定以外の共通点を見出すことは困難である。そのため、人々は内部者との共通点よりも、「外部の存在」、自分とは根本的に違う「なにか」をもつ集団に注目し、それを基に自分集団と他集団とを分けるのである。

このように、さまざまな「文化」に対する見解が述べられる中で、松尾は「ジャズとしての文化概念」を提唱している[松尾 2007:36]。ジャズとは、多くの音楽のジャンルの中でも、比較的自由度・即興性が高く、異なるジャンルの組み合わせであり、そして時間軸に沿って変化するものである。松尾は文化をジャズに見立て、「プロセスとしての文化」、「混成の文化」、「動的な文化」、「権力装置としての文化」、「変革する対象の文化」という、5つの視点から文化を論じている。ジャズは即興性が高く、演奏の過程で作り上げられているものである。周りのリズムやキー、雰囲気を感じながら、また時には反発しながらメロディーを作り上げていく。それはすでにプロダクトとしてある曲ではなく、そのコンテキストの中で作り上げられていく、プロセスなのである。文化も同じようにコンテキストの中で変動する、それが第一のプロセスとしての文化である。第二の混成の文化とは異質な要素が混じり合う文化である。これまでの文化とは、単一的であり純粋性が強調されていた。しかし実際には、文化を構成する集団は民族、性、宗教、年齢など様々な集団に同時に所属している。2人の個人が完全に重なり合うように複数の集団に属することは不可能である。そして文化とは異質な要素を持つ個人が集団となり構成されるものである。そのため、文化とは異質なものが混じり合うジャズのように、混成であるといえるのである。第三の視点は動的な文化である。ジャズは演奏の中で、また時代の流れとともにその形を変化させて

きた。文化もまた、状況や時間によって変化するのである。たとえば、文化は文化を構成する要素、民族や階級、ジェンダーなどの多くの軸が交差しあい、それぞれの要素の関係性からその意味や形が決定される。また、時間の経過により、とくに現代のグローバル化する社会では文化を構成する要素が他の文化との間を行き来することによって、常にその意味は変化している。つまりそれはこれまでの固定的で性的な文化ではなく、動的なものとして文化をとらえることが必要だとしている。第四は権力装置としての文化である。ジャズはその人気が高まるにつれ、ジャズという概念の固定化という危機に直面してきた。文化はジャズと同じように、また上記の動的な側面を持つとともに、一つの文化の概念が理解されるにつれそれは固定化されかねないのである。たとえば、以前のアメリカ社会における白人至上主義や、以前の日本における男性優位の社会は、その文化が固定化することによって文化間、集団間に対立関係または権力図が生成されるのである。現在でも文化とは動的であると同時に、一つの概念が固定化し権力装置として機能する場合もあるのである。最後に変革する対象の文化である。これまでの文化の概念は、すでに存在するものとしてそれを理解する対象であった。しかし、現在では文化とは存在すると同時にまた作り上げられていくものとしてとらえられている。ジャズと同様に、不平等な集団間の社会関係などを新たに作り変える対象なのである[松尾 2007:50]。

第1節と第2節では文化概念の潮流を紹介してきた。第一節では、文化とは固定的であり純粋なものであると述べ、第二節では現代の文化の捉え方、つまり文化とは動的であり混ざり合うものであると述べた。文化には明確な境界線はなく、そのあいまいな線により人々にとって異なる文化間の移動は容易となり、そのために互いの文化は人を媒介とし、混じりやすくなる。人が動きを止めない限り、すべての文化は変化し続けるのである。しかし、現代の文化概念は、松尾が述べたような権力装置の役割、つまり固定的であり混じり合わない側面も持っていることも否めない。つまり文化が動的であるにもかかわらず、人は一つの文化に対し、何かしらの評価をすることは可能であり、それは避けようのない事実なのである。次節では、現代の日本の若者における文化概念に本質主義的な解釈が含まれるのかを、アンケート調査による結果をもとに分析する。

3. 現代の若者における文化本質主義の実態

現代の若者における文化本質主義的意識の実態を検証するため、20代前半の若者を中心にアンケート調査（巻末資料）を行った。対象者は、海外居住経験の有無を問わず、20代前半の男女である。本アンケートでは大まかに4つの質問を対象者に尋ねた。1つ目は、複数のエスニシティそれぞれに対して、そこに所属する人々に対する共通認識があるかどうかである。対象のエスニシティは4つ、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、そして日本である。アメリカは一つの国に対する本質主義の意識の有無、ヨーロッパは複数国の集団に対する意識の検証として、アジアは日本を含む複数国の集団に対する意識の検証、そして自国としての日本という4つに分けた。2つ目は異なる文化は平等に扱うべきか。3つ目は日本社会の中では日本人同士で差異と共通点のどちらのほうが強く感じるか、そして最後に、自分は日本人とを感じるかそれともアジア人と感じるかどうかである。検証として、まず各エスニシティに対するそれぞれの共通意識の有無を量的に分析し、回答を類型化する。その後、それぞれの分類を代表する回答と他と異なるを回答者ごとにみていく。その後、結果をもとに回答者自身は日本社会の中でどう感じているか、各文化それぞれに対して本当にステレオタイプのイメージを持っているかを検証し、最終的に文化本質主義の検証につなげていく。

まず各エスニシティに対するそれぞれの共通認識を尋ねる質問（「特に性格上で〇〇人の持つ特徴は？」）では表2のような結果を得た。この質問では各エスニシティに対する回答者がもつイメージを挙げてもらい、はたしてそれがそれぞれのエスニシティの内部全体に対する共通認識であるかどうかを訊いている。その質問に「はい」と答えたものを「共通認識がある」、「いいえ」と答えたものを「共通認識がない」と捉えた。

	アメリカ人	ヨーロッパ人	アジア人	日本人
ある	31%	38%	31%	53%
ない	50%	25%	44%	13%
ある程度	10%	25%	10%	31%
わからない	6%	9%	9%	0%
未回答	3%	3%	6%	3%

表2：各エスニシティに対する共通認識について[筆者調べによる]

すべてのエスニシティにおいて、「ある」と答えた人数はほぼ変わらない結果となった。しかし「ない」に関しては、アメリカ人に対するものが極端に少ないことが分かった。さらに共通認識が「ある程度」とあるという回答に関しては、アメリカ人に対す

るものがほかのエスニシティよりも倍以上多いことが分かった。日本人に対する共通認識は、4つのエスニシティの中で最も共通認識が「ある」人が多い。この回答から、あるエスニシティに対しての共通認識の有無の要因として「量的要因」「回答者との関係性」「近接性」の三つの可能性を挙げることができる。まずは量的要因である。アメリカ人と日本人に対する共通認識の割合は高く、アメリカ人に対する共通認識は主に「愛国心がある」「陽気」「個人主義」「社交的」などが挙げられ、日本人に対しては主に「集団主義」「礼儀正しい」「まじめ」などが挙げられる。これらの認識は多くの回答者に共通するものであった。しかし共通認識の度合いが低かったヨーロッパ人とアジア人に対しては「伝統を重んじる」「楽観的」「社交的」「親切」「怒りっぽい」など、両方のエスニシティに対し一貫性が見られない。これは後者のエスニシティが含む人種や国が多く、それぞれの回答者がイメージする対象が異なるからだと考えられる。

2つ目に回答者自身との関連性の有無である。自由記述式のアンケートの回答からうかがうことのできる回答者それぞれの各エスニシティに対する関係性では、関係性が低いまたは高いものに対しては共通認識が「ない」ものが多く、関係性が中程度、たとえば対象地域を「旅行したことがある」程度の関連性の場合は、共通認識が「ある」場合が多くみられる。「関係性」とはその土地や民族に対する馴染み度である。たとえば、アメリカ人の特徴に関して、「個人主義、成果主義、やられる前にやる、自分のことは自分で決める。農業系（虫、植物など）の言葉は派生して作られているものが多いが、狩猟系（牛肉、豚肉など）の言葉は個別のものが多い」という回答からは、その解答者がアメリカに対してある程度知識を備えていると予想することができる。実際にこの回答者はアメリカに渡航した経験があり、彼女はアメリカ人に対し共通認識が「ある」と答えている。逆にヨーロッパ人の特徴に関しては、「第一言語でなくとも概してよくしゃべる」「積極性」のような回答がある。「第一言語でなくとも」と答えた回答者は、ヨーロッパに1年間近く滞在した経験があり、ヨーロッパとの関係性は高い。そのような回答者には共通認識が「ない」者が多くみられた。「積極性」と答えた回答者は逆にヨーロッパへ渡航した経験が一度もなく、回答からも回答者のヨーロッパとの関連性は想像できない。このような回答者にも共通認識が「ない」という者が多くみられた。3つ目に、可能性として、そのエスニシティまたは文化と回答者の近接性、つまり日本国内においてその文化が浸透しているかが挙げられる。日本に根付いている文化は、もともとそこに実在する日本文化と、若者文化との関連性が高

いアメリカ文化である。それは例えばファストフードやスターバックスのような喫茶店チェーンなどの食文化や、国内のショッピング街のいたるところで見つけることのできるブランド店からみることのできる衣文化、さらに日本語における英語由来の外来語の多さなどから実感できる。しかし、飲食店をはじめその他ヨーロッパを象徴するような施設はあまり見かけることはないし、それはアジア、たとえば中央アジアや中東といったアジア諸国を象徴する施設の数も同じである。日本国内においてなじみのある文化ほどそれに対する文化の本質化は強く、逆にあまりなじみのないものに対しては抽象イメージを持ち、その文化に対しての共通認識は「ない」あるいは「わからない」のではないだろうか。

次に、日本文化に対する認識を含めないアンケート結果では、ある文化に対して共通認識が「ある」回答者はすべての文化に対し共通認識が「ある」、またある文化に対し共通認識が「ない」回答者はほかの文化に対しても共通認識は「ない」傾向が分かった。このような「ある」のみ、または「ない」のみの回答は全体の 59%であった。本アンケートでは「すべての文化は平等に扱うべきか」を問う質問も含まれており、その回答と各文化に対する共通認識についての回答を比較すると、「平等に扱うべきである」と回答した人は各文化を本質化する傾向があり、逆に「平等に扱うべきではない」と回答した人は文化を本質化しない傾向があることが分かった。「平等に扱うべき」と答えた回答者の意見の中は、例えば以下のようなものがある。

「文化は人々の日々の営みの集大成であると考えているので、あらゆる文化は歴史と同等の価値があり、文化の優越にかかわらず、そこからあらゆる学びや教訓などが得られると思うから」。

「すべての文化が平等に扱われないと、差別が生まれて争いにつながるから」。

しかし、「平等に扱うべき」と答えた回答者の中には「経済などとは違い、優劣をつける基準があいまいであり、自国の文化を基準に考えるのは正しくないと考えから」、「ひとつの文化が消えることはその現地の人々のアイデンティティがなくなるに等しいから」という意見も見られた。アンケートでは彼らの多くは各文化に対しステレオタイプのイメージを持っていることがわかる。そこには各個人の「平等性」に対する意見と文化の「優劣」に対する意見の食い違いが見られる。上記の回答におけ

る「自国の基準で考えるのは正しくない」と答えた者は、それでも各文化の特徴を、ヨーロッパ人は「ケセラセラな感じ」、アジア人は「まじめ」などを挙げる。そしてアメリカ、ヨーロッパ、アジアという括りにおいてそれらに対する共通認識は「ある」と述べている。「アイデンティティがなくなる」と答えた回答者でも、意見の中で取り上げている現地の人々の「アイデンティティ」を、彼らに対する共通認識を持つことによって否定しているのではないだろうか。本研究におけるアンケートでは、文化を「平等に扱うべき」と答えた人は88%に上り、文化の平等性は現代の若者の意識の中では重要度が非常に高い。しかし、それにもかかわらず、他文化に対するステレオタイプをぬぐいきることができない。

さらに興味深いのは、日本以外の文化に対してはステレオタイプはないものの、日本文化に対しては共通意識が「ある」人が比較的多数いたことである。先に述べた共通認識に関する3つの要因では「近接性」「自己との関連性」「量的要因」の可能性を上げた。そして「関連性」が高いあるいは低いものに対しては共通認識がなく、中程度なものには共通認識があると述べた。しかし、回答者は全員日本人であり、日本文化との関連性が高いにもかかわらず、他文化に対する共通認識はなく日本文化に対しては「ある」と回答している。さらにアメリカ人に対する共通認識は「ない」が、日本人に対しては「ある」ことから、「量的要因」は排除してもよいだろう。つまり、アンケートの回答者全体の傾向として、ある文化あるいはその文化内の人間に対する共通認識は、「近接性」が最も重要な要因であると現段階では結論付けることができる。

次に回答者の海外滞在経験の有無の違いによる回答の違いを見ていく。海外滞在経験とは、ここでは海外に半年以上、留学等の都合で滞在したことのある者を指す。今回のアンケートでは海外経験者はほぼ全員がイギリスへの留学を経験している者となった。まず、各エスニシティに対する特徴に関する回答では、海外滞在経験者とそれ以外の回答者との間ではあまり差異は見られなかった。共通認識の有無でも「ある」と「ない」で同じようなばらつきがみられ、日本以外の文化に対する本質化は海外経験の有無とは関連性がないといえる。しかしこれに比べ、日本人に対する特徴を聞いたとき、海外滞在経験者と未経験者の間では意見に相違がみられた。一つ目に、日本人の特徴を挙げるとき、日本人がもつ習慣や価値感などの内的特徴を挙げるか、それとも身体的特徴等の外的特徴を挙げるかである。海外滞在経験者は前者の内的特徴を挙げる傾向があり、未経験者は外的特徴を挙げる傾向がみられた。たとえば「クリス

マスやバレンタインが商業的である」、「おじぎ、『失礼します』『お疲れさまでした』などの挨拶」は、海外滞在経験者の回答である。前者の回答は日本における季節行事の特徴である。回答者の多くが滞在経験のあるイギリスでは、クリスマスは家族の行事であり、出かけることは少なく、家で家族とともに過ごすのが一般的である。しかし日本では、家族のイベントであると同時に企業商品や飲食店などでクリスマスをテーマにした商品が並べられる。こういった情景は日本人にとって当たり前のものであり、違和感を感じることはない。しかし、ヨーロッパでのクリスマスを経験することでカルチャーショックに似たようなものを強く感じるのである。さらに、後者の回答で述べられている日本のあいさつやお辞儀も、日本で過ごし、普段から当たり前のものとして行うことに違和感はない。しかし、実際にはお辞儀は日本や他の少数のアジア諸国のみで実践される習慣である。学生の間では「お疲れさまでした」というあいさつは別れ際などで頻繁に、むしろ必要以上に使われている。しかし、海外に滞在し日本語文化から離れると、「お疲れさまでした」という表現を翻訳することが困難であることに気づき、改めてその言葉について考える機会を得るのである。以上、文化の違いに触れるという理由から、海外滞在経験者は日本人の特徴として内的なものをあげると考えられる。逆に、海外滞在未経験者は日本人の特徴として外的特徴を挙げる傾向がある。たとえば、「他人をじろじろ見るところ」、「背が低い」などである。これは上記の内的特徴を挙げる理由とは逆に、日本で暮らすことにより気がつくもの、つまり周囲の人々の身体的特徴や行動の仕方が、自然とそれが日本人の特徴になるのではないだろうか。以上のことから一つの文化に対する認識は存在するが、それは共通なものではなく個人の経験差によって作り上げられているものだということが予測できる。

アンケートでは、回答者自身が日本社会で暮らすうえで、周囲の日本人と差異を感じるか、もしくは共通点をより強く感じるかを聞く質問もあった。回答は全体ではほぼ半々で差異を感じる回答者と共通点をより強く感じる回答者がいた。この質問では「差異を感じる」と答えた回答者の回答内容に興味深い特徴がみられた。彼らの中の大多数、80%の回答者が「差異を感じる」にもかかわらず、日本人に対する共通認識があると答えている。これは「文化」としてみる場合と「自分と文化」としてみる場合では異なるからではないかと予測できる。文化を見たとき、その文化のイメージははっきりあるものの、自己と比べることにより自己と文化の間に差異が強調される。

これは本質主義の不正確性と、しかしまた本質主義とは不可避なものであるととらえることができる。

アンケートの4つ目の質問は「自分は日本人とを感じるか、それともアジア人と感じるか」を尋ねたものである。この質問に対する回答は、他の質問で見られた「わからない」という回答はなく、「日本人」「アジア人」「両方」の3つに分かれた。その中でも特に「日本人」という回答は75%と多く、次いで「両方」が16%、「アジア人」が9%となった。最も少なかった「アジア人」という回答者の意見は、少ないにもかかわらず、多様な意見であった。まず、「ほかのアジア人と区別がつかないと思うから」という回答では、外的特徴を述べており、アジア以外の国からの視点で述べている。この回答者はイギリスへ1年間留学し、日本に帰国した直後にこのアンケートに回答したものである。次に、「日本人は東南アジアと似ている要素があるのではないかと感じた。アジアの友達と話をすると共通項が多く見つかった。その点では私はアジア人なんだと感じた。」という回答である。この回答で、回答者は自分を東南アジアの人と比較しながらも、日本人の視点を持つ。そして3つ目が、「海外での生活が長く、日本にいた期間が短いので、日本人とのノリや習慣にカルチャーショックを受けることが多々ある」である。この回答で回答者は自分は日本人ではない、つまりアジア人であり日本には帰属していないと主張している。上記3つの回答はそれぞれ異なる視点から回答しているが、これらすべては「自分がどこに帰属しているのか」を自己の特徴とアジアまたは日本文化を照らし合わせた結果となっている。つまり、文化を本質化することにより、自分は何なのかを模索した結果である。

次に75%を占める「日本人」という回答についてである。彼らの「アジア人に対する共通認識」や「日本人に対する共通認識」についての回答は、「ある」と「ない」で同じようなばらつきがみられる。しかし、日本人とを感じる理由を要約すると「日本の特徴がある」と「アジア人とは異なる」の大きく2つにわけることができる。日本の特徴として「あいまいな表現を好む」、「協調性」、「謙虚さ」などがあげられるが、これらは日本文化の本質を表現するような意見である。「アジア人とは異なる」意見には、「日本と他のアジアの国々とは様々な点で違いがあると思うから」、「アジアのほかの国の人を外国人だと思うから」、「日本がアジアの一部という感覚はあまりない」がある。これらは、まず日本をアジアと同一視していない傾向がある。しかしそれではなぜアジアとは異なるのか。それは前述した量的要因として「アジア」というくくり

多くの国が含まれているということがあげられる。さらに近接性としてアジアのみを視野に入れると日本は離れているという感覚もあるのかもしれない。これらが示唆することは「日本」という存在であり、アジアとの異なる本質である。さらにその本質とは、アジアという枠組みからは国単位であるということが分かる。

4. 文化本質主義の可能性

文化はその本質が実在することが前提として議論されてきたにもかかわらず、最近では本質主義を否定する意見が多く出ている。それはアンケート調査で近代の若者には文化本質主義を否定する意見が多かったことから、本質主義は否定すべきものであるというのが現代の主流思想であることがわかった。しかし、アンケート調査では現代の若者は本質主義に否定的であるにもかかわらず、無意識的に文化を本質的にとらえており、たとえばアメリカに対するイメージは回答者の大多数が同じような意見を持っていたため文化を本質的にとらえることに正誤性はなく、否定することはできないのである。さらに今回のアンケート調査では、文化の本質化は主に国単位で、さらにその文化の近接性が主な要因ということが分かった。回答者の意見では自文化は他文化とは異なるという主張もいくつか見られた。それはローゼンスが述べた「グループへの帰属意識に必要な外部の存在の一般化」と同等であり、自文化の本質化を否定した意見ととらえることもできる。しかし、それはまた外部、今回の場合は「アジア文化」を自文化と比較した上での本質化なのである。そして、普段なにげなく感じる「他文化の特徴」は、アンケートでアメリカ、ヨーロッパ、アジア、そして日本の特徴を挙げたものに代表されるように、文化本質主義を象徴するものなのである。現代の潮流は反文化本質主義である。しかしまた文化本質主義は不可避なものなのである。

第3章 日本という文化

1. ステレオタイプの日本文化

第2章での議論により、文化本質主義は不可避なものであるため、本質主義の観点から文化を見ることは意義があることがわかった。本章では日本、そして日本人の文化を、ステレオタイプのものと実証的な研究に基づくものの二つの観点から見ていく。日本人の本質を先行研究から見出し、その後、第4章で扱う留学による日本人の気質の変化へとつなげていく。

ステレオタイプの日本文化とは、実証的な研究に基づかない、表面的な日本文化のイメージである。それは日本人という単語から湧き出るイメージであり、個々の経験から得られるそれぞれの日本像である。それは日本人の身体的特徴や性格、または抽象的もしくは具体的な日本文化のイメージなどが含まれる。前章で紹介したアンケート回答者によるいくつかのエスニシティに対するイメージはほぼすべてこのステレオタイプに該当するものである。一般的に使用される「ステレオタイプ」という言葉は、ネガティブにとらえられる場合が多いが、本章ではあくまで実証的な研究がおこなわれずに描かれた主観的なイメージという意味で使用する。アンケートでも日本人に対するイメージを尋ねる質問があったが、本章では日本人や海外の研究者による先行研究をもとに、詳しく日本人論をみていく。

現在まで多くの研究者が各々の日本人論を展開してきたが、戦後、そしてこれまでの日本人論の中でも代表されるものがルース・ベネディクトによる「菊と刀」である。「菊と刀」は戦争直後、日本人のそれまでの姿を率直にとらえるとともに、戦争中の価値観を否定された時代における日本人自身に、日本人とは一体どういうものなのかを突き付けるものであった。ベネディクトが研究から提唱した日本人像は「恥の文化」であり、そして「面子」である。「菊と刀」ではベネディクトの主観により、常にアメリカとの対比において日本を表現している。つまり日本人に初めて突き付けられた日本人像というものはアメリカとは対になるものであり、はたしてそれが是か非かは日本人にとって判断しがたく、しかしベネディクト主観による本書は奇異と驚きに満ちているためそれがどちらかというと非またはマイノリティであると認識せざるを得ないものとなっている。まず彼女が挙げる第一の日本人像、「面子」について以下の引用

のように結論付けている。

「その行動が世界の人々にどう思われるかということが、大切なことであった」[ベネディクト 2005:44]

この引用は日本人が戦時中、戦争遂行のためにいかに支持されたかを表している。「恥の文化」とは「面子」と深く関わり合う。日本人には守るべき「面子」があり、それが守れないと「恥」になるのである。それは例えば現在の日本人の縦社会文化の中でも表面化している。日本社会において、今でこそその傾向は弱くなりつつあるものの、目上・目下の関係は日本人の無意識的なところにまで根付いている。若者の間でも、年齢差により「格」というものが決まり、年上に敬語を使うことは当たり前であり共通認識となっている。そのため年下の者から、とくに人前で敬語を使われないと、それは「面子」を汚すこととなる。しかし興味深いことにその「面子」は外国人に対しては発揮されない。つまり年下の外国人が年上の日本人に対して敬語を使わなくてもそれは許されてしまうことが多々ある。それは日本人の「面子」とは内集団内で適応され、「恥」は主に外集団に対して発せられるものだからではないだろうか。日本人には裏表の顔があるとよく言われるが、上記の引用はそれらをも表しているのである。さらにベネディクトは、日本人は事象を「あらかじめ計画されていた」ものとして見る傾向があるとしている。

「すべてが予知され、計画され、十分計画された事柄であるという仮定に立つことによってのみ日本人は、一切はこちらから積極的に欲したのであって、けっして受動的に他から押し付けられたのではないという、彼らにとって欠くことのできない主張を持続することができたのである。」[ベネディクト 2005:42]

「…日本人はあらかじめ計画され進路の定まった生活様式の中でしか安心を得ることができず、予見されなかった事柄に最大の脅威を感じる」[ベネディクト 2005:44]

日本人にとって物事はすべてすでに決まっているものでなければならず、例外は異端であり回避または排除すべきものなのである。生活様式から仕事、遊び、旅など日本人の生活に溶け込むすべてのものには「マニュアル」が存在する。現在でこそそれ

はなくなりつつあるものだが、それをいまだに歓迎する人も多く、「マニュアル」は完全に否定されているものではない。たとえば仕事で接客する場合、リスクを最低限に抑えることは当然であり、それを実現するためにマニュアルが存在する。日本の公的機関では前例の有無にとらわれ例外を問題視する。しかしそれは確実な業務をこなすためでありリスクの最小化である。それは日本が島国であり、物資の希少性が日本人にとって無視できない問題であった歴史からといわれることもあり、物事の確実性は日本人にとって必要不可欠だからではないだろうか。ベネディクトはさらに日本人の不合理性を日本人の湯に対する考えから次のように述べている。

「湯をたてる経費と労力とを節減するために、さまざまな方法が工夫されているが、とにかく日本人はなんとかして湯に入らずにはいられない」[ベネディクト 2005:219]

アメリカ人であるベネディクトには風呂に湯を張るという文化はない。この引用文は彼女にとって日本人は細かいことにこだわる奇異な存在であることを暗示している。この引用からわかるように日本人には「湯船につからない」という選択肢はない。つまり、日本人はそれまで正しいと思っていたことから外れることはなく、それは正しいことであり、その規範から抜け出す必要はないのである。しかしまた、日本人はそれまで行われた「前例」を改善しようと試みる。それが日本人がマニュアルから脱しない理由なのではないだろうか。このように、ベネディクトによる日本人像とは「恥の文化」であり「面子」を重んじ、そして例外を認めない「マニュアル」文化であるとしている。

日本人の特徴としてよく挙げられるのが「集団主義」である。どの先行研究においても日本人の「集団主義」は避けることのできない概念であるため、多くの研究は集団性を前提したうえで、またそのもの自体を議論の中心とするあるいは批判対象とし、集団主義にとらわれている。日本人の集団主義性が妥当であるかは一概にしては述べることはできないものの、海外からの日本人像、そして日本人自身の共通認識として集団主義を上げることは事実であり、そのためその議論は避けられるものではない。高際は日本人の集団主義を研究する一人であり、彼は著書で日本人が集団を構成する上での必要概念である「和」を取り上げている。日本人の集団には「和」が存在する。

和集団こそが日本の文化なのだと高際は主張する。彼はそんな日本人の文化を日本人の仕事の在り方から次のようにあらわしている。

「ジョブディスクリプションによる集団ではなく、有機的な集団」[高際 1987:89]

「和が存在するとき、それぞれの仕事の範囲は不明確になる」[高際 1987:89]

つまり日本において、人は個よりも集団が尊重されているのである。多くの日本の職場ではある程度の汎用性が求められる。そのため一分野でのスペシャリストではなく、多分野で活躍できる人材が求められる場合も多い。同じ職場の同僚を手助けすることは、個にとって必ずしも有益にはなりえない。しかしそれぞれの仕事を集合した一つのものとして理解し、全体で助け合い行うことは全体としての時間的な効率が上がり、臨時に発生する人件費も抑えることができるのであり[高際 1987:89]、集団にとっての利益となるのである。さらに集団を尊重する「和」集団は、集団の成長によりさらに個々が活性する。高際は日本における仕事の様式で次のことを述べている。

「我が国において会議は必ずしも決定の場ではなく、より正確には、『会議は和を讃える荘重な儀式でなければならない』」[高際 1987:92]

個より集団が優先される日本では、どの会議においても満場一致が理想であり、それが必要である。「根回し」という習慣が存在する日本文化では、会議にはすでに議論がなされ決定されたものを携え、挑むのである。この日本での会議の在り方は一人の反対者も出してはならない。表面上だけでも決定事項はその場全員の意思でなくてはならず、一つの集団としての決定において一人でもかけることは士気低下につながる。そのため日本では「和」を保つため「根回し」が行われ、会議は議論の場ではなく意思確認の場として扱われるのである。このように高際は日本文化は「和」の意識により、個人よりも集団を優先する文化だと主張している。

日本人の特徴はグレゴリー・クラークにも研究されている。先述したルース・ベネディクトの観点からもわかるように、日本人とは他の文化、とくに欧米文化と比べ、かなり異なる性質を持っている。グレゴリー・クラークも日本に対し、集団主義という共通認識を持ち、彼の学者、外交官、ジャーナリストという3つのキャリア経験か

らによる多角的アプローチにより集団主義を日本の文化の基本概念とし日本文化の特殊性を強調している。彼は「日本人の情熱と受動性の奇妙な共存の背後には何があるのか。ある状況ではきわめて思慮深いのに、別のときにはまったく無分別になるのはなぜなのか」[クラーク 1977:2]と述べている。日本人は外国文化からみるといかに矛盾したように得るのか、いかに理解しがたい文化なのかが読み取れる。そのような彼の研究では、まず集団主義についての考察が書かれている。

「日本の社会の仕組みを例えるなら、それはまるでひとつの家族である」[クラーク 1977:74]

これは先述した高際のいう「和」と同じ考えである。日本社会は上下関係による縦の文化により序列が組まれている。会社ではそれが先輩後輩の関係や年功序列などで表れている。さらに日本ではいかなる集団内においても上下関係は形成される。「ギャング集団、政治派閥その他の内部的結束の固い集団の長は親分であり、それに従う物は子分」[クラーク 1977:75]になるのである。クラークはこのような関係を親子関係としてあらわしている。日本の集団内では、欧米のようにここが独立しているのではなく、上の者が下の者の面倒をみる、つまり親子や兄弟の関係である。さらに日本の会社における年功序列制度もこの家族的アプローチであり、全員を平等に昇進させることにより摩擦や嫉妬を回避させることができる。そして集団の和が保たれるのである。日本人にとって他人の面倒をし、自分の面倒をみてもらうのが無意識化に正しいこととされ、そのために集団の和は不可欠なものであり、年功序列制度という和を持続させる制度が取り入れられているのである。さらに日本人は「日本人は他人の利益や感情を傷つけるような利己主義に対しては、非常に敏感にこれを避けようとする」[クラーク 1977:79]。これは日本と欧米のメディアを比べてもわかることである。欧米の広告等にはしばしばライバル社の批判が直接的に掲載させる場合があるが、日本では皆無である。さらに日本の広告は柔らかな雰囲気のものが多いが、それも集団の和を保つという文化からきているものなのである。そのような家族的集団を形成する日本文化は周囲との関係が強く常に他人を意識しなければならない。個性が強く突出するのも日本社会においては避けるべきものとされてきた。異端なものは家族とみなされにくいからである。家族でないものは「よそ者」として排除する対象となるのである。

クラークは次のように述べている。

「海外移住は、日本における集団の圧力と、すべてのものを包み込まずにはおかない同質性から逃れるための唯一の道なのである」[クラーク 1977:62]

クラークはノーベル賞を受賞した江崎を例に挙げている。江崎はもともと個性が強く、オリジナリティあふれる研究者であった。彼にとってチームを組んで研究することを好む日本の環境は息苦しいものだったのである。もちろん、チームで研究する傍ら独自の研究に励むという選択肢もあっただろう。しかし日本社会においてチームに属した者は同分野においてチーム外での行動は慎まなければならない風である。そのため、江崎は日本の集団から抜け出すためにアメリカに移住し、結果ノーベル賞を獲得することになる研究成果を出すのである。この点にのみおいて日本の集団主義は人間個人において欠点である。しかしまた日本は家族的な社会を形成することにより面倒をみあうことにより発展してきたのも事実である。日本文化とは、社会単位で家族関係を形成し、上下関係という縦社会が成り立っている。日本人は集団主義という価値観をその環境から自然に学びとり、それがそのまま日本人の文化として定着したのである。

以上、3人の視点からみた日本人文化とはベネディクトによる「恥の文化」「面子」「マニュアル」、高際が提唱する「和」、そしてクラークが検証した「集団」というキーワードにより象徴される。これらは比較的多く人々から聞くことのできる日本人像であり、もっとも一般的な日本人像であるといつてよい。しかし、これらはステレオタイプの日本人像、つまり日本人文化の本質を必ずしも正確に表しているとは限らない。次節では実証的研究による日本人の特性を見ることで、本節のステレオタイプの日本人像と比較し、内的と外的または表面的な日本人像を描き出す。

2. 実証的な研究に基づく日本文化

一般的に人の第一印象と性格、つまり他人に対する外的要因による判断とその人の内面は相違する場合が多い。文化や人種に対する評価も同様であり、外的要因や噂、または比較対象数の少なさなどの理由によるバイアスによりある文化を主観の意味で

評価している場合が多い。たとえば序論で挙げたドイツ人とオーストリア人の例がそうである。しかし文化の内面を統計や言語の分析によって評価すると、ステレオタイプのイメージとは異なる結果になる場合もある。日本文化は他の文化と比べ複雑な構造をしており、理解するのは難しいとされている[クラーク 1977:3]。そのため行動様式の観察等の外的要因による評価ではなく、統計的や結果や専門的な知見からの客観的な評価が、日本文化の特性をさらに深く理解するのに必要なのである。

まず実証的研究結果とステレオタイプの観察からの結果が相違する点は「集団主義」についてである。心理学者であるマツモトは、アメリカ人と日本人を対象にアンケートによる日米比較研究を実施し、日本人はアメリカ人と比較しそれほど集団主義ではないという結果を出した。彼の第1の研究結果は「日本人はアメリカ人よりも家族間では個人主義である」ことである[マツモト 1999]。しかし、友人や同僚が相手だと日米間ではあまり差が出なかったことから、これは人との関係性から異なるとされている。第2の結論として、個人に対する文化の影響力の低さを挙げている。マツモトが個人が質問に回答するうえで「個人」「状況」そして「文化」の3つの影響力を調べた。結果、「個人」の影響力が強い、つまり人が変わると回答も大きく変わるということがわかった。さらに「状況」は個人の影響よりも強く、状況が変わると回答も変わることが分かった。しかしそれに対し文化の影響力はあまり見られなかった。つまり、同じ状況下におかれた人は同じような回答をし、状況が変わるとみな同じように解答を変える、ということである。つまり日本人はアメリカ人やそのほかの外国人よりも集団主義であるということは必ずしも言えることではなく、文化の違いによって性格や主義が変わることはないのである。第3の結論として彼は日米両国の人々において「個人主義」と「集団主義」は同じような割合で存在するとしている。もし日本人が集団主義であり、アメリカ人が個人主義であった場合、図1の左図のように人の分布が偏るはずである。しかしマツモトのアンケート調査によると分布は両国において同じようなばらつきがあった。つまり図1の右図のように両国において集団主義的思考の持ち主と個人主義的思考の持ち主の分布は同じような広がりを見せ、大部分が重なるのである。これは個人が集団主義であるか、もしくは個人主義であるのかは文化の相違により発生するものではなく、個人的なものなのであることを表している。

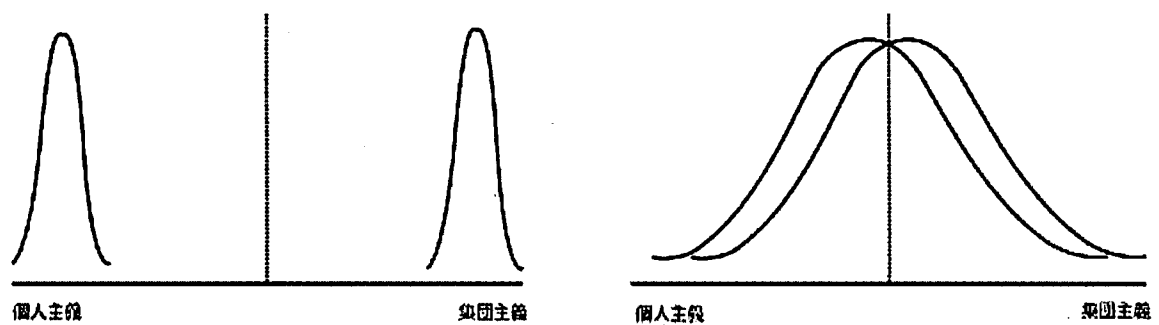


図1：集団主義と個人主義の分布[高野 2008:290]

言語からの視点で研究された日本文化もステレオタイプの日本文化とは異なる結果が出ている。廣瀬と長谷川による研究では、言語的視点で日本文化は自己主張性が高く、集団主義で「和」を尊重するという日本人像とは異なっている。彼らの研究の第一のポイントは、日本語には自分意識が強く表れるということである。自己を表す表現として言語には伝達の主体としての「公的自己」と思考・意識の主体としての「私的自己」の二つがある。日本語の場合、英語と比較すると自己を表す表現が、「僕」、「私」、「自分」と多様であるが、英語の場合は「I」のみである。日本語における一人称表現は「僕」や「私」を使うと私的自己なのか公的自己なのかは前後の文脈や言葉のイントネーションを聞きとらなければ判断できない。それは英語においても同様である。しかし、「自分」という表現は常に私的自己なのである。つまり、日本語ではどんな文脈にもかかわらず一人称がだれなのかを明確にできるという特徴がある。次の例文では日本語の一人称の私的自己性と英語の公的自己性が表れている。

- (1) 「秋男は、僕は泳げないと言っている」
- (2) 「秋男は、自分は泳げないと言っている」
- (3) 「Akio said, I can't swim」

[廣瀬 2010:20]

(1) の文では、「僕」がはたして秋男を指しているのか、もしくは話し手を指しているのかあいまいであり、文のイントネーションを読む必要がある。この場合の「僕」は、私的自己の場合は秋男を指し、公的自己ならば話者を指す。(2) の文も同様であり、文だけでは「I」が誰を指しているのか分からない。しかし、(2) では「自分」が

秋男自身のことを指しているのは明確であり、話者を指すことはない。つまり、「自分」を使うことによってそれは私的自己であり、必ず「自分」よりも前に付く人物を指す。日本語は「自分」という一人称表現があることで他人依存型の文章を避けることができる。しかし英語の場合の「I」は、自分では理解していてもどうしても聞き手の解釈が必要となってくる。つまり、英語は他人依存型なのである。日本語は「自分」とは誰なのかが文章において明確である。そのため、日本語は英語より「自分意識」、もしくは自己と他者を分ける意識が強く、日本人は必ずしも「和」や「集団主義」に当てはまるわけではないのである。

英語における人称代名詞では、自己と他者を一体化するという使い方もある[マツモト 2010:53]。

(4) When I visited Tokyo, I didn't see many handicapped people on the streets.

(5) You don't see many handicapped people on the streets of Tokyo.

[廣瀬 2010:53]

上記の例文(4)は自己の経験を話している。そして例文(5)は自己の経験をもとに「You」を一般化し、一般論を述べている。日本語においては「自分」と「あなた」もしくは「きみ」が一体化することはないし、また二人称を一般化して使うこともない。この点において、英語は自己と他者を等位関係を前提とする、他者指向性の強い言語なのである。

反対に、日本語は話し言葉において自己志向性が強い[廣瀬 2010:71]。例えば日本語の話し言葉において、自分自身の事柄を話すとき、人称代名詞を使うことはあまりない。「勝ちたい!」と言ったとき、この文章の対象は話し手であることは明確である。「彼に勝ってもらいたい」と言ったときも、この文章は「彼」の考えではなく自分の考えであることは間違いない。しかし英語の場合、前者を訳した場合「I want to win」となり、後者を訳した場合は「I want him to win」となる。つまり、英語の話し言葉において自己を表現する場合は「I」は不可欠であり、逆に日本語では一人称表現はあまり重要ではない。むしろ日本語の話し言葉で上記のような表現をする場合、一人称表現を取り入れると不自然になってしまう。つまり、日本語の話し言葉は自分音ことを話すことが前提とされているのである。そのため、文章に一人称表現が入れなくて

も、そこには常に自己を表現しているのである。日本語は、むしろ自己中心的な言語なのである。

以上マツモトや廣瀬らによる研究では、日本は必ずしも「集団主義」の国とはいえないことが分かる。しかしその反面ではまた日本は集団主義、個体単位ではなく集団単位の文化であることが、小林修一の研究では言われている。彼の一つ目の研究では日本的思考の基盤にメトニミー的論理があるとし[小林 2009:74]、二つ目の研究では日本語には社会関係を表現するとき個人を単位とするのではなく、その「場」によって変化するものであるとしている[小林 2009:164]。メトニミー的論理とは、日本語における「極小化」と「見たて」にあらわされる。日本語では事象を何かにたとえて、とくにメタファーとしてではなく、ある事象や物をそれに関連する何かで言い換えてあらわすメトニミーが多い。たとえば「白バイに捕まる」という文を聞いた時、「乗り物である白バイに捕まった」という様にはとらえづらく、「白バイに乗った警察官に捕まった」ととらえるのが自然である[山本 2001:226]。さらに日本文化は外の「ソトのなじみのない事象を表現・把握するために、それを内のなじみ深いものになぞらえ、見たてる」[小林 2009:74]習慣がある。たとえば日本庭園における石や砂利を山岳や水の流れに見たてることがそうである。心の中にあるイメージを、目の前にあるシンボルに投影することによって、そのイメージを抽象的かつ本質的にとらえようとしているのである。このように日本文化はある事象そのものを見るのではなく、何かにたとえる、つまり個を見るのではなくそれをシンボル化することにより理解を深めようとする。それが「極小化」であり「見たて」である。このようなシンボル化や見たてによって日本語は個人を一つの存在として完結させるのではなく、その「場」全体を自己と比較し状況を把握する。つまり日本語は個人を人格的關係に基づくものではなく、その「場」による影響が強く反映される。たとえば日本語の授受動詞では文章における目的語に対する話し手の関係性によって使い方が変化する。「太郎は由紀子に花をあげた」、「太郎は由紀子に礼をくれた」という二つの文章があった場合、由紀子と話し手との関係性は前者の場合では見出せないが、後者の場合何らかの身内関係にあるととらえることができる。英語の場合、「あげる=give」となるが、日本語のように他人もしくは身内としての使い分けはない。日本語はその状況によって身内という他者を自己と同意義にとらえるという特性があるのである。

日本人の集団主義意識、もしくは個人主義意識は NHK 文化放送研究所が 1973 年

から 2008 年にかけて約 5500 人に行ったアンケート調査でもみることができる。まずアンケートでは日本人の意識変化の質問では、項目は全部で 17 項あり、「生活に満足しているか」、「目上の人に敬語を使うか」などを尋ねている。その中の 2 項目は、日本に対する帰属意識を訪ねるものであり、「日本に生まれてきてよかった」という意識は 1973 年から 2008 年にかけて 90%以上の人たちがもっており、「自分なりに日本のために役立ちたい」という意識も全ての年において 70%前後の人たちが持っていた[NHK 文化放送研究所 2010:210]。これらはある集団に対する帰属意識を表しており、この結果から日本人は以前からある国に対する意識に変化はないが、いずれも高い数値を示しているため、以前から現在にかけて日本人は帰属意識、集団意識が高いことが分かる。仕事に関する意識調査では、最も理想とする仕事の条件を 10 項目²の中から選んでもらった結果、「仲間と楽しく働ける職場」が 1973 年から現在にかけて常に最も票を得ていた[NHK 文化放送研究所 2010:141]。反対に、「独立し、人に気兼ねなく働ける仕事」が下位 2 位であり、仕事の面でも日本人は集団で働けることを望む、つまり集団主義的意識が強いと言えるのである。しかしその反面、別の質問では、日本人の人間関係においては「形式的な付き合い」が親戚同士、隣近所、そして職場において増えてきていることも分かっている[NHK 文化放送研究所 2010:193]。「形式的な付き合い」とは「会ったときあいさつを交わす程度」の関係である。つまり不特定多数を相手とする場合、日本人は集団意識や仲間意識は持たない傾向になってきているということである。これは国や会社といった大きな集団への帰属意識の低下を表しており、つまり日本人の意識は少しずつ集団主義から個人主義へと移ってきているのである。

日本人は集団主義であるか、もしくは個人主義であるか。この答えは各研究者ごとに異なっている。それは日本という文化、または日本人という分類は、決してひとつの性質を導き出せるものなのではなく、むしろある 1 つの性質について日本という文化の中に追求すれば、その性質は必ず見つかるといっても過言ではないのである。次章では、日本人という分類をさらに絞り、「日本人留学生」という枠からその性質を見極めたい。

² 選択可能な 10 項目は「働く時間が短い仕事」、「失業の心配がない仕事」、「健康を損なう心配がない仕事」、「高い収入が得られる仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」、「責任者として、さいはいが振るえる仕事」、「独立して、人に気兼ねなくやれる仕事」、「専門知識や特技が生かせる仕事」、「世間からもてはやされる仕事」、「世の中のためになる仕事」[NHK 文化放送研究所 2010:140]

第4章 異なる条件下での日本人留学生の特性と実体

文化はその本質が実在するものとしてとらえられるべきものであり、日本文化にもまたその本質が実在する。しかしまた、個々人間では文化内においても、共通点を残しながらもその特性に差異がある。本章では本論文のテーマである日本人留学生の日本での特性と留学先での特性を比較し、その相違点を見出し「日本人留学生」というカテゴリーにおいていかにその特性が日本と留学先で変化するのかを検討する。検討資料は主にアンケート調査に基づくものである。

1. アンケート内容と対象

アンケートは過去に半年以上の留学経験、または海外経験のある大学生である男性11人と女性8人に対して行った。本論文では非多文化状況下と多文化状況下における日本人学生の特性を比較検討するため、海外に生まれたときから、または中学校以前から住んでいた学生は対象にしていない。

アンケートではまず各対象者の性格測定を水野[Mizuno 2008:13]の指標をもとに、5段階評価で「勤勉性」「外向性」「洗練性」「情緒不安定性」「協調性」の5因子に分け、割り出した。その結果を外国人、つまり留学先の国の人たちとの関わり合いの仕方と比較することによって、日本での生活における日本人としての彼らの特性が、それぞれどのように留学先で変化するのかを見出す。一般的に言われる文化の特徴は、集団主義もしくは個人主義、または直接的な表現が多い、間接的な表現が多いなど言語的、コミュニケーションの要素が多い。そのため本章ではコミュニケーションに焦点を当て、それに関する日本人留学生の特性を検討していく。アンケートの構成はまず性格測定をし、その後各個人の留学中における他者との関わり方を記述してもらっている。

2. 非多文化条件下における日本人

第3章においてステレオタイプの日本人像と実証的な研究における日本人像は異なることがわかった。ステレオタイプの日本人像は、ほぼ誰の解釈においても集団主義である。たとえばベネディクトによる「周りから見た自分を気にする」[ベネディク

ト 2005:44]ことや高際による「集団としての個」[高際 1987:89]という、直接「集団主義」とはいわないもののそれを思わせるものである。それに比べマツモノや廣瀬らによる実証的な研究、また NHK による世論調査では日本人は集団主義である半面個人主義の面もあることがわかった。とくに日本語の研究では、日本語における「自分」をどうとらえるかにより、それが「自分」自信を強調あるいは主張するものになり、相手と「自分」の社会的位置関係が「場」の変化に伴い変容するという性質をもつ。さらに NHK のアンケート調査では日本人は仕事では集団主義的な価値観で、プライベートでは個人主義的な価値観でというように分ける傾向があることが分かっている。そのため日本人を完全に集団主義もしくは個人主義の枠組みに組み込むことはできない。しかし、これらの研究では類型化要因として「状況」を考慮しているものはない。日本人の若者は、非多文化条件下において一体どのような性質をもち、またどのように彼ら自身のことをとらえているのだろうか。

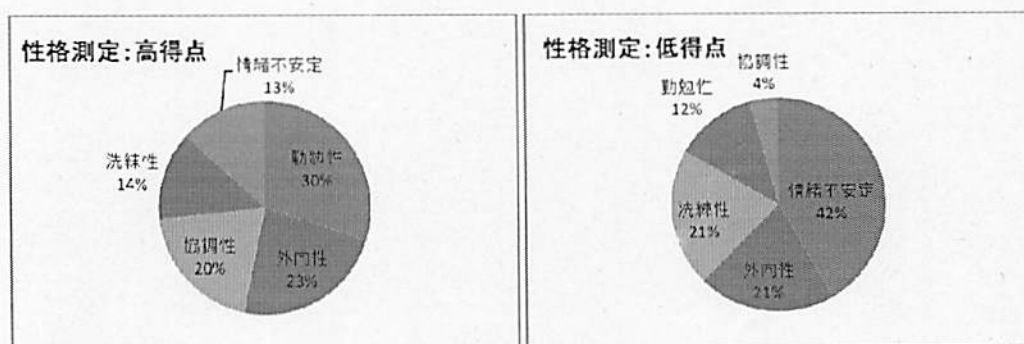


図 2：性格測定結果 [筆者調べによる]

本研究のアンケートで非多文化条件下の日本人の性質を調査するうで行ったことは「性格測定」[水野 2008:16]と、彼ら自身をもつ日本人像の記述を求めるものである。性格測定で使用した一つ目の因子、「勤勉性」は、値が高ければ困難においても努力することを表す。本研究においては、留学生が海外に移った時どれだけ「意識的」に現地コミュニティまたは現地の学生と交流できるかの指標になる。二つ目の「外向性」は対象のコミュニケーション能力や明るさを表わす因子である。対象が普段、非多文化条件下において周囲と接触、交流できるかを表している。この因子の値と海外での生活習慣の比較は本研究では最も注目すべき点の一つである。三つ目の「洗練性」は物事を行う上での要領の良さや、自分が感じる周囲からの自己イメージの良さである。この値が高ければ自尊心が高い、または自分に自信があるということである。四つ目の「情緒不安定性」は不安度である。この値が高ければ「外向性」が低いことが

予想されるが、海外留学という未経験の地での生活に対する不安による影響が強く表れるのがこのタイプである。最後に「協調性」である。この値は対象が個人主義、もしくは集団主義のどちらかよりであるかの判断する重要な手掛かりの一つである。性格測定は各因子に対し回答者自身の行動や考え方に対する4つの質問項目があり、各質問に五段階評価で得点を付けてもらうものである。各因子は最大で20点、最低で5点となり、その中で最も得点の高い因子と最も低い因子がアンケート回答者の性格もしくは特性を表わす。何人かの回答では最高得点または最低得点が同点になった因子もみられたので、以下の図2では合計人数が必ずしも19人ではない。図2は性格測定の集計を表し、結果は最も多く高得点を取ったのが「勤勉性」であった。そして23%、20%と同じくらいの数値で「外向性」と「協調性」が高得点であった。日本人留学生は全体的に努力タイプであることがうかがえる。しかしこの結果からはこれがはたして日本人留学生のみのものなのか、もしくは日本の若者、あるいは大学生全体を表しているものかは判断できない。次に、最も得点が低かったのは「情緒不安定性」である。ほかの因子と比較しても倍以上の割合があることから、本研究の対象グループには普段の日常生活において不安度は低いものとみなすことができる。両グラフから、本研究の対象グループは全体的に非多文化条件下においては比較的社交的であることが分かった。

次に、彼らの性格ごとに、非多文化状況下において彼らが自身のコミュニケーション能力についてどう思っているのか、「あなたは大勢の中で発現することに躊躇しますか」という質問により回答を集めた。その結果「躊躇しない」が8人、「躊躇する」が6人、「どちらとも言えない」が5人であり、どれかの答えに偏ることはなかった。そこで各高得点因子ごとに質問の結果を見てみると、「外向性」または「洗練性」が最高得点であるグループはすべて「躊躇しない」という答えであった。そして「情緒不安定性」が最高得点であるグループでは全員が「躊躇する」という結果がでた。「協調性」の得点が高いグループは「躊躇しない」が2人、「躊躇する」が3人、「どちらともいえない」が1人だった。「勤勉性」の得点が高いグループでは「躊躇しない」が3人、「躊躇する」が4人、「どちらともいえない」が1人だった。この結果から、「協調性」と「勤勉性」はコミュニケーションにおける自信の度合いはあまり関係がない

と言える。以上の結果から、アンケート対象の日本人留学生は、コミュニケーションの面から 4 つの類型に分けることができる。一つ目は「外向性」か「洗練性」、もしくは両方をもった「社交型」。二つ目は「情緒不安定性」を代表する「非社交型」。三つ目に「勤勉性」または「協調性」があり、多人数グループの中で発言を躊躇しない「努力型」。そして「勤勉性」または「協調性」があり、多人数グループの中で発言を躊躇してしまう「慎重型」である。各型ごとの人数は「社交型」が 7 人、「非社交型」が 4 人、「努力型」が 4 人、そして「慎重型」が 3 人という結果になった。次節ではそれぞれの型が留学中どのように行動するのかを検討し、その変化を見ていく。

3. 多文化条件下における日本人

多文化条件下における行動はアンケートの質問でシチュエーションを具体的に説明し限定したうえで尋ねた。本研究では特に英語圏への留学者が対象のため、アンケートでは英語の資格や個々の主観的な自信度を尋ね、さらに留学先での行動の尋ねた。しかしアンケート回答者数名は英語圏以外のヨーロッパへの留学であったため、言語要素を含む質問はその都度、留学先のホスト言語に切り替え尋ねた。本節では、まず前節で分けた 4 つの類型をもとに、各方において英語の自信度がどれほどのものかをみる。その後、「英語の主に話す相手に対し、自分から話しかけるほうか」という質問と英語の自信度、さらに性格判定結果の 3 つをまとめ、パターンを見出す。さらにこの結果に対し、「英語で話すとき本当の自分を出せているか」という質問もその後考慮する。

英語力を尋ねる質問は 2 種類、アンケートに組み込んだ。1 つは「英語に関する資格は何を持っているか。この質問は客観的に回答者の英語力を知るためのものである。この質問の回答を集めたところ、資格を何も持っていない回答者 2 人を除き、全員が TOEFL iBT 75 点以上の資格 (IELTS や TOEIC は TOEFL iBT に換算) を持っていたため、本研究において分析することはできなかった。2 つ目は回答者自身の主観において、自分の英語能力は「生活レベル」、「大学レベル」、「ビジネスレベル」のうちのどれかを尋ねたものである。この質問は、資格は客観的な指標であるがあまり会話において重要ではないため、資格にかかわらず本人の英語能力に対する自信度を測るために尋ねたものである。この指標において、「生活レベル」は日常会話ができる程度、「大学レベル」は英語圏の大学において授業についていける程度、「ビジネスレベル」

は現地で働ける程度の英語能力となり、「生活レベル」が最も低く、「ビジネスレベル」が最も高い指標となる。その結果、全体では「ビジネスレベル」が2人いた以外、全員「大学レベル」もしくは「生活レベル」だった。各類型ごとには、「社交型」は6人が「大学レベル」以上、「非社交型」は1人が「大学レベル」、「努力型」は1人が「大学レベル」、「慎重型」は1人が「ビジネスレベル」であり2人が「生活レベル」だった。図3が以上のデータの集計である。図3のグラフでは、「社交型」が最も語学力が長けているように見える。

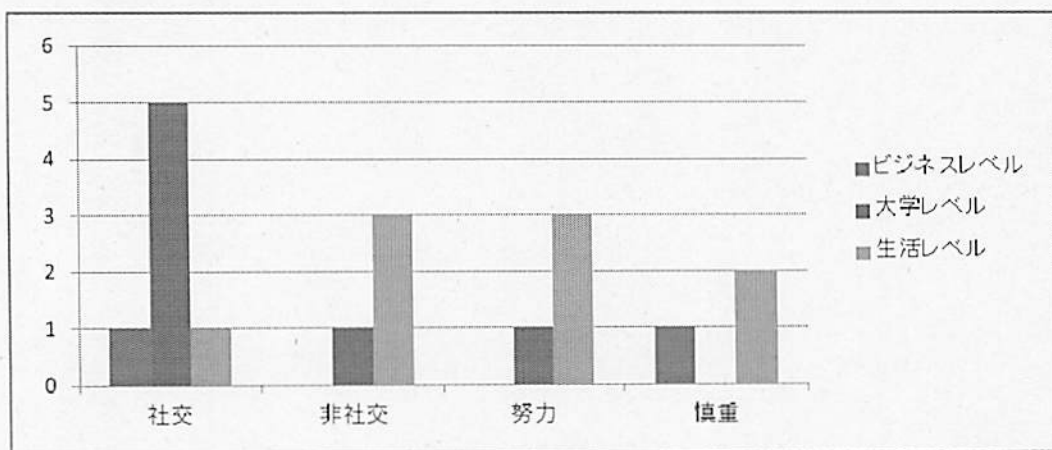


図3：各類型における英語能力【筆者調べによる】

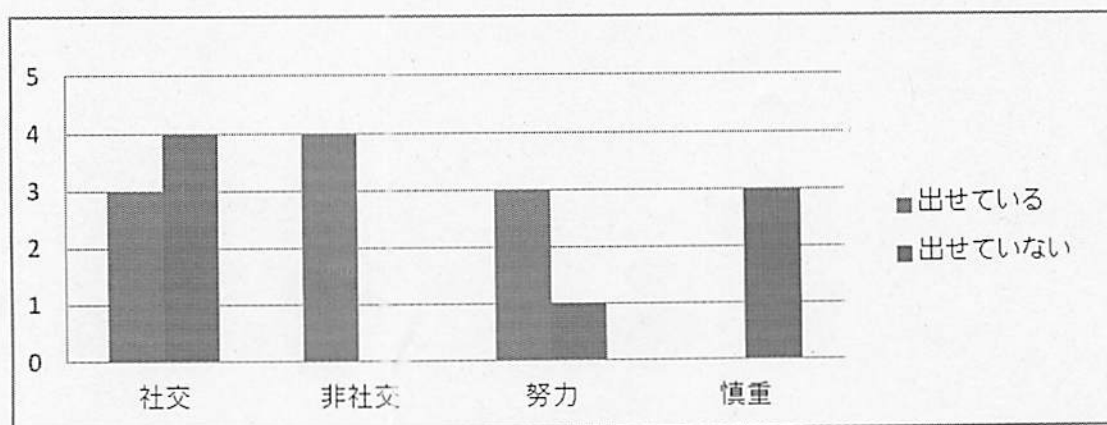


図4：各類型における、留学先で「本当の自分が出せているか」の結果
【筆者調べによる】

次に「英語の主に話す相手に対し、自分から話しかけるほうか」の質問である。この質問に対して、ほぼ全員が「自分から話しかける」と答えており、アンケート対象の人中3人のみ「話しかけられることが多い」と回答した。「話しかけられる」と答えた回答者は「社交型」、「努力型」、そして「慎重型」から各1人ずつであり、「社交型」と「努力型」としては意外な結果がある。この3人の英語能力は「社交型」が「ビ

ジネスレベル」、「努力型」と「慎重型」が「生活レベル」と答えている。これら3人の共通点はアンケートからは見つけることは出来なかった。しかし、ほぼアンケート回答者全員が「大勢の中での発言を躊躇する」、もしくはしないにも関わらず「話しかける」と答えていることから、1対1の場合、どの日本人留学生も相手に自分から話しかけるという特性を持っているといえる。

次に留学先で英語を話しているときには「本当の自分が出せているか」という質問である。この質問では「出せている」か「出せていない」で答えてもらい、「出せていない」と答えた人にもその理由を自由記述で尋ねた。その結果、図4のようになった。「社交型」ではほぼ半々、「努力型」では「出せている」が3人で「出せていない」が1人であった。「非社交型」は全員が「出せている」と答えており、「慎重型」の全員は「出せていない」と答えた。「非社交型」については、全員が「本当の自分が出せている」としているため、非多文化条件下から多文化条件下に移動してもあまり変化はないように見える。「慎重型」についても、大勢の集団の中では気軽に発言できないという特性から、環境の変化によって本当の自分が出せないのは容易に予測ができるため、あまり環境による影響はないように見える。そこで、非多文化条件下から多文化条件下への移動による環境の変化を「社交型」と「努力型」における「大勢の中での発言に躊躇しない」が「本当の自分が出せていない」と感じる留学生の回答に注目する。

「大勢の中での発言に躊躇しない」が、留学先では「本当の自分が出せていない」と答えた留学生は、「社交型」では4人、「努力型」では1人いた。「社交型」の意見では「英語ではうまく表現できず、誤解される不安」や「言いたいことより会話を成立させることを優先する」といった言語による影響と、「共通した会話があまりない」という文化の相違による影響が主な理由であった。「努力型」については「相手に伝わらなかった時の遠慮」という言語による影響の意見があった。つまり、環境の変化による影響は、文化間の相違もあるが、言語に対する不安感が最も重要な要因なのである。言語に対する不安感はアンケート結果によると実際の言語能力とはあまり関係がないことが分かる。実際に、「大勢の中での発言に躊躇しない」が「本当の自分が出せていない」と感じると答えた回答者の中の4人はTOEFL iBT85点（英語圏の大学への留学の最低条件）以上と同等の英語能力があるにもかかわらず、英語に対し不安を持っているが、「本当の自分が出せている」と答えた回答者の中にはTOEFL iBT74

点の者や英検 2 級程度の英語能力の回答者もいた。これは言語能力自体は環境変化による個人の変化にはあまり関係がないことを表している。さらに、資格だけでみた英語能力が低い者でも、自己評価では「流暢に話せる」や「大学レベル」と答えている者は「本当の自分が出せている」と答えている。しかし、「大勢の中での発言に躊躇しない」が「本当の自分が出せていない」と感じると答えた回答者は、「生活レベル」という回答や、「大学は頑張ればいける」といったような回答があり、自分の英語能力を低く評価する傾向があるといえる。つまり、個人の変化は言語に対する自信度によるものが大きいと言えるのである。

4. 状況の力

以上をまとめると、次の 4 つが本研究の結果となる。まず一つ目は、どの文化にも同じことが言えるが、日本人は集団主義や個人主義のどちらにも分けることができない。しかし、日本人留学生においては、個々の独自の特性があるにもかかわらず、人との交流において、1 対 1 の場合は高い確率で自ら話しかける特性を持っている。二つ目は 4 つの種類のうちの 2 つ、「非社交型」と「慎重型」は非他文化条件下と他文化条件下において、コミュニケーションにおける行動はあまり変わらないということである。三つ目は、「社交型」と「努力型」は文化的条件が変化することによって、コミュニケーションにおけるその性質も変化するということである。四つ目は、変化は言語能力にはあまり関係なく、その言語の自信度によるものであることが分かった。つまり全体的にみると、非他文化条件としての日本での生活時と他文化条件である留學生活時では、集団としては比較のおとなしい印象をもたれることが予想できる。しかし、彼らはホスト文化と同じように個々人間において性質が全く異なることは、誰もが予測することは容易である。ではなぜ日本人は比較的「集団主義」や「おとなしい」と思われがちなのかだろうか。

そこには心理学でいわれる「対応バイアス」というものがある。「対応バイアス」とは、初対面の相手と話し、その際相手の性格等を判断するときに起こるものである。人は相手の性格や能力を判断するとき、状況の力を考慮に入れず、相手から発せられた言葉、または直接見ることのできる相手の行動により相手を判断してしまう傾向がある[高野 2008:208]。たとえば、ディベートの際のスピーチを行う場合、賛成か反対をくじ引きで決め、行うスピーチもくじ引きで決めた場合でも、それを聞いた聴講者

はスピーチの内容が対象人物に帰属するものだと思い込んでしまうという実験が行われている[外山 2001:18]。つまり、判断を行う人物は、相手を判断するときには状況を考慮しないのである。これは日本人留学生に対しても同じことが言える。3 節で述べた、日本人留学生の変化は、その人の性格に外向性があったり協調性があったりにかかわらず、「相手にちゃんと伝わるか不安」という状況によっておこるものである。しかしそれにもかかわらず日本人に「集団主義」や「おとなしい」といった印象が強いのは、この対応バイアスが働いているためだと言える。

第5章 結論

1. 文化本質主義のとらえ方

文化における本質主義は、「文化」という概念にとってなくてはならないものである。「文化」とは一言で定義することは非常に難しく、一つの答えがあるわけではない。それは、「文化」とはそれを定義するためには無限ともいえるようないくつもの前提や条件を考慮し、それらすべてを簡潔に言い表すことは非常に困難だからである。しかし、「文化」というあいまいな概念を通し一つの文化をみると、その文化にはほかのどの文化からも差別化することが可能なほど特徴が浮かび上がってくる。ある文化、そしてその文化が国という単位でとらえられた場合、たとえば「中国とはどのような国ですか」と街を歩いている人々に聞けば、各々異なった、しかし何かしらの答えが返ってくるだろう。文化本質主義は学説的には今も否定されているが、その概念は完全に否定できるものではないのである。

文化本質主義とは、その利点が生かされる場合もあるが、その反対もまた同じである。文化本質主義の利点とは、本論文の冒頭で述べたように、筆者が留学中にイベントを行ったときに感じた。ある意味ステレオタイプ、もしくは偏見となってしまう文化本質主義の視点は、場合により相手を性格や性質をあらかじめ予測し、交流において活用できるという利点がある。筆者の場合、当時の筆者の偏見により日本人、イギリス人、ヨーロッパ人と対象ごとに接し方を変化させた結果、一つのプロジェクトを成功させることができた。実際、それが一般社会において適用されるかどうかは確かではない。しかし、海外経験が初めてである留学生がほぼ全員を占める状況では、本質主義の視点による状況の対処は適切であったのではないかと感じる。しかし、そのような環境でも、文化本質主義は一個人に対しては一時的なものでしかない。つまり、文化本質主義によるステレオタイプは他人と対面したときの第1段階でしか使われえない。第2段階として第4章で挙げた「対応バイアス」が相手の判断に強く影響する。そして第2段階を経たのち、本当の相手が徐々に見えてくるのである。この一連の流れの最初である文化本質主義によるステレオタイプは、相手の文化の平均を知る手掛かりにできる。しかしまた、そのステレオタイプは偏見であることを強く理解していないといけなないのである。さらに異なる文化の人間が交流する際、言語というすべて

の人が必ずしも克服可能ではない壁があることを理解していなければならない。

2. 日本人留学生とは

文化本質主義に関する以上の結論では、日本人留学生の性質を定義する意義を確認するためには必要不可欠なものであった。次に日本人留学生の特性を本節でまとめた。

第4章でも挙げたとおり、本研究では日本人留学生を4つの分類に分けた。その中でも特に注目したのが「社交型」と「努力型」の学生である。彼らは日本という非多文化条件下の社会において、いわゆる社交的であり、進んで他者との交流を深めていくタイプの人間である。一般的に、このようなタイプの人間はどの多文化に入り込んでも問題なく生活できると思われがちである。しかし、実際に多文化条件下におかれたとき、もっともその特性が変化するのがこの2つのタイプであった。本研究では、その「変化」がその人物にとって良いものなのか、または悪いものなのかは言及していない。しかし、他のタイプより比較的外向性の高い2つのタイプが変化するということは、全体的に「日本人留学生」という集団の性質がおとなしく見えるようになるのは確かである。さらに、留学において、ホスト国である諸外国の学生は、普段日本人を実際に見かけることもなければ交流することもほばないに等しい。そんな中で「日本人留学生」との交流は彼らにとって「日本人」との交流なのであり、それは彼らにとって「日本」という文化に触れる体験なのである。つまり、日本文化は日本人留学生を介して印象付けられ、その印象とは変化したものなのである。

実際、筆者が留学中、プロジェクト運営では日本人とイギリスやヨーロッパの学生と話す機会が多くあった。その中で感じたことは、日本語を主言語としたミーティングと英語を主言語としたミーティングでは、日本人の発言率が顕著に減少である。日本語でのミーティングで多く発言する「社交型」と「努力型」の変化を実感したのである。それが始め会話の相手により変化するものなのか、もしくはほかの理由があるのか定かではなかった。しかし今回の研究で、その変化に対し最も影響が強いのか言語に対する自信度であることが分かった。

3. 課題

本研究は文化本質主義の検証から始まり、その後日本人留学生の特徴の変化を検証

した。日本人留学生を検証するに当たり、本研究ではアンケートを用いたが、その数が絶対的に少ないことが本研究の欠点である。さらに日本人留学生のアンケート対象はほぼ全員がイギリスへの留学生であることを留意しなければならず、イギリス以外への留学、たとえばアジア圏への留学生を対象にした場合、結果は異なるものになるかもしれない。本研究においてはイギリスへの日本人留学生の特徴の変化をつかめた
が、アジアやアフリカ、アメリカなど対象国を増やしていくことで、包括的な結果が望めるだろう。

文化本質主義についての調査アンケート

この調査は、文化本質主義についての研究に関するアンケート調査です。第一部では1から5の中から最もあてはまる数字を選んでいただきます。第二部・第三部では各質問に対し自由回答方式で回答していただきます。回答可能な項目に対しては、できる限り詳しく回答してくださるよう、お願いいたします。「回答できない」「回答したくない」項目に関しては、強制ではありませんのでその欄は空欄にしたまま、次の質問へ進んでください。

この調査は、全ての回答は匿名のものとして扱います。調査結果全般についての問い合わせにはお答えできますが、個別的な回答結果については回答者ご本人からの問い合わせである場合を除きお答えいたしません。

第零部：基本情報

年齢：

性別：

海外滞在期間（あれば）：

海外滞在時期（あれば）：

海外滞在先（あれば）：

滞在理由：

第一部：ここでは、各質問に対し5点（非常にあてはまる）から1点（全くあてはまらない）の中から最も自分に当てはまると思った数字を質問の横に書いてください。

日本で生活しているとき、・・・

- 1) 初対面の人にも気軽に話しかけることができる
- 2) 頼まれた仕事は快く引き受けるタイプだ

- 3) 飽きっぽい性格だ
- 4) 結構心配症である
- 5) 自分ってどんくさいなあと感じることが多い
- 6) 他人に嫉妬したことなどない
- 7) 1人でいる方が気楽でいい
- 8) 人からよくマイペースだといわれる
- 9) やると決めたらとことんまでやる
- 10) いやなことがあってもすぐに気分転換できる
- 11) 自分の考えはセンスが良いとよく褒められる
- 12) 人の噂話が好きだ
- 13) 「元気」がわたしの取り柄である
- 14) お年寄りの相手をするのが好きだ
- 15) 仕事はおおざっぱにやってしまう方だ
- 16) 気分がころころ変わりやすい
- 17) 私は人に騙されやすいと思う
- 18) 私はいつでも他人に甘く、自分に厳しい
- 19) 普段はおとなしい方だ
- 20) 自分はひねくれ者だと思う
- 21) だらだらするのは好きではない
- 22) あんまりくよくよしないタイプだ
- 23) 仕事の要領を覚えるのは早い方だ
- 24) 気になる人の手帳を拾ったらつい中を見てしまう（だろう）。
- 25) 大勢のグループの中で発言することに躊躇しない。

第二部：第二部は自由記述方式です。なるべく詳しく記述してください。

- 1) 文化間に優劣があると思いますか？その理由は何ですか？
- 2) すべての文化は平等に扱うべきだと思いますか？その理由は何ですか？

- 3) 日本は単一民族国家だと思いますか？その理由は何ですか？
- 4) 日本に外国人や他民族の人をもっと受け入れるべきだと思いますか？その理由は何ですか？
- 5) 日本の社会の中では、日本人同士の間でのいろいろな差異よりも、全体として共通する文化/価値観/習慣のほうをより強く感じますか？その理由は何ですか？
- 6) 日本人の特徴だと思うものは？
- 7) 先にあげた日本人の特徴は日本人共通のものだと思いますか？
- 8) 先にあげた日本人の特徴は日本人をだれと比べて考えられたものですか？
- 9) ヨーロッパ人の（特に性格上の）特徴だと思うものは？
- 10) 先にあげたヨーロッパ人の特徴はヨーロッパ人共通のものだと思いますか？
- 11) アメリカ人の（特に性格上の）特徴だと思うものは？
- 12) 先にあげたアメリカ人の特徴はアメリカ人共通のものだと思いますか？
- 13) アジア人の（特に性格上の）特徴だと思うものは？
- 14) 先にあげたアジア人の特徴はアジア人共通のものだと思いますか？
- 15) 自分はアジア人だと感じますか？それとも日本人だと感じますか？それはなぜですか？

- 16) あなたには自分の拠り所となる居場所、または自分が所属すべき居場所が必要だと感じますか？また、現在あなたにとってそのような場所はどの程度あると思いますか。

第三部：第三部は自由記述方式です。なるべく詳しく記述してください。

- 1) 「外国人」ときいて最初に思い浮かぶ人種は？
- 2) あなたは自分自身、英語はどの程度喋れると思いますか？
- 3) あなたの英語能力は英語圏の外国で生活するには十分だと思いますか？
- 4) あなたの英語能力は英語圏の外国の大学で勉強するには十分だと思いますか？
- 5) あなたの英語能力は英語圏の外国で仕事をするには十分だと思いますか？
- 6) 何か英語に関する資格があれば書いてください。(TOEFL など)
- 7) 外国人（問 1 で答えた人種）と話すとき、いつもの自分が出せていると感じますか？
- 8) 上記の質問で自分を出せていないと感じた人は、どのように出せていないとおもいますか？
- 9) 上記の質問で自分を出せていないと感じた人は、なぜ出せていないのだと思いますか？
- 10) 外国人（問 1 で答えた人種）と接するとき、自分のことを日本人だと感じます

か？それともアジア人だと感じますか？それはなぜですか？

【以下 11~14 の質問は、日本語以外の外国語が少しでも話せる方のみ回答してください】

- 11) あなたが話せる外国語は通じるが日本語がわからない、ほぼ初対面の外国人と一緒にいるとき、あなたは自分から積極的に話しかけるほうですか？話しかけられるほうですか？
- 12) あなたが話せる外国語は通じるが日本語がわからない、仲の良い外国人と一緒にいるとき、あなたは自分から積極的に話しかけるほうですか？話しかけられるほうですか？
- 13) 10 人の友人グループ（あなたが使用できる外国語を主な共通言語として使用できるグループ）がボーリングをしています。そのうちの 1 人はあなたで、日本人はあなたを含めて 2 人で、その他 8 人は日本語がわかりません。あなたはその日本人の友人に話すとき日本語を使うと思いますか？それはなぜですか？
- 14) 10 人の友人グループ（あなたが使用できる外国語を主な共通言語として使用できるグループ）がボーリングをしています。そのうちの 1 人はあなたで、日本人はあなたを含め 8 人で、その他 2 人は日本語がわかりません。あなたは日本人の友人たちに日本語で話すと思いますか？それはなぜですか？
- 15) その他、何か書き足したいことがあればお書き下さい。

質問は以上です。

ありがとうございました。

参 考 文 献

アンダーソン、ベネディクト

1983 『Imagined Communities』 Verso.

NHK 放送文化研究所

2010 『現代日本の意識構造 第七版』日本放送協会。

カレン、バートン

2007 『The Assets of Cultural Pluralism: An Account of Cross-Cultural Learning and in Preservice Teacher Education』 Nova Science Publisher.

クラーク、G

1977 『The Japanese Tribe: Origins of a Nation's Uniqueness』村松増美訳、サイマル出版。

栗原彬

1997 『講座 差別の社会学 第3巻 現代社会の差別構造』弘文堂。

クローバー、A、L. クラックホーン、C

1952 『Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions』Vintage Books.

ゴードン、M

2000 『アメリカンライフにおける同化理論の諸相 - 人種・宗教および出身国の役割 - 』倉田和四生・山本剛郎訳編、晃洋書房。

小林修一

2009 『日本のコード:「日本的」なるものとは何か』みすず書房。

酒井直樹

1996 『ナショナリティの脱構築』柏書房株式会社。

末広美樹

2006 「日本人留学生のアイデンティティ変容」大阪大学出版会。

数土直紀

2010 『日本人の階層意識』講談社。

関根政美

1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア』成文堂。

外山みどり

2001 「社会的認知の普遍性と特殊性 - 態度帰属における対応バイアスを例として・」『対人社会心理学研究』No.1:17-24

戴エイカ

1999 『多文化主義とディアスポラ』明石書店。

タイラー、E

1871 『Primitive Culture』Murray.

高際弘夫

1987 『日本人にとって和とはなにか』商学研究社。

高野陽太郎

2008 『「集団主義」という錯覚』新曜社

ニエト、ソニア

1992 「Critical Social Issues in American Education: Towards the 21st Century」『Affirming Diversity: The Sociopolitical Context of Multicultural Education』1st ed. Allyn & Bacon Publisher.

ヌスバウム、M.C.

1992 「Human Functioning and Social Justice」『Political Theory』vol.20 No.2:202-246

浜岡剛

1996 「人間のエルゴンとロゴス：アリストテレスの本質主義と倫理学(1)」『古代哲学研究室紀要』vol.6:79-93

バルト、フレデリック

1969 『Ethnic Groups and Boundaries』Universitets Forlaget.

廣瀬幸生、長谷川葉子

2010 『日本語からみた日本人－主体性の言語－』開拓社。

ベネディクト、R

2005 『菊と刀』長谷川松治訳、講談社学術文庫。(Ruth Benedict, 1946, *The Chrysanthemum and the sword*. Houghton Mifflin)

ベリー、J. ダーセン、P

1974 『Cross-Cultural Psychology: Research and Application』Cambridge

University Press.

松尾知明

2007 『アメリカ多文化教育の再構築－文化多元主義から多文化主義へ』明石書店。

松元雅和

2007 『リベラルな多文化主義』慶応義塾大学出版会。

マツモト、D

2001 『文化と心理学』南雅彦、佐藤公代訳、北大路書房。(David Matsumoto, ?, *Culture and Psychology – People around the world*, Thomson Learning.)

Matsumoto, D., Kudoh, T., Takeuchi, S.

1999 「Changing patterns of individualism and collectivism in the United States and Japan」『Culture & Psychology』2:77-107

馬淵仁

2001 『「異文化理解」のディスコース～文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会。

水野邦夫

2008 「簡便な性格測定尺度の作成について－性格の5因子モデルをもとに－」『聖泉論叢』13: 13-23。

文部科学省

2010 「日本人の海外留学者数について」『報道発表』文部科学省。

山本幸一

2001 「言語における概念化」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要第4号』223-230

横田雅弘

1997 「青年期における留学のインパクト」『文化とこころ－日本人の異文化生活と文化葛藤－』vol.2 No.1: 12-16. 相川書房。

ラヴィッチ、D

1997 「多文化主義－多から成る多」『多文化主義－アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの場合』多文化社会研究会編訳、木鐸社。

ローゼンス、E

1994 「The Primordial Nature of Origins in Migrant Ethnicity」 『The Anthropology of Ethnicity: beyond "Ethnic Groups and Boundaries"』 edited by Vermeulen, Hans & Govers, Cora. Aksant Academic Publisher.

Summary

The word “culture” cannot be defined with a number of simple phrases. Culture exists in any place where human communities live, and it represents the communities’ way of living, people’s identity, and values. Culture also has its uniqueness in that no culture can be exactly the same as another. The size or the level of culture also varies depending on the individual who describes it. For example, it can be defined by countries, prefectures, ethnicities, or even as small as the family unit. The concept of culture is not easy to define. Many people would find it an easy task to define one of the cultures they are familiar with. For example, if one were to define German culture, they might immediately be able to come up with the word “punctual”. Culture has been studied throughout the past decades and up until the recently, and the main stream of the study of the culture was represented by the views of “assimilationism”, “cultural pluralism”, and “multiculturalism”, which together are called “cultural essentialism”. However after the 1980s, the view of anti-cultural essentialism has gained its popularity and this study can be supported by researchers such as Barth(1969), Anderson(1983), and Roosens(1994). Anderson criticized cultural essentialism with “print-capitalism” claiming that a culture that is represented by a nation is a calculated imaginative creation by languages [Anderson 1983:159]. In addition, Roosens claims that the existence of different cultures is not necessary, but that people only need the concept of outsiders in order to gain the unity within their own groups [Roosens 1994:83]. However, despite the fact that the main stream has shifted to the view of anti-cultural essentialism, it is true that the existence of different cultures is an unavoidable fact, and people still see other cultures in a stereotypical light which can sometimes be in a rather negative way.

From September 2010 to August 2011, I have been to the United Kingdom through an exchange program, and have gained experience in project management. The group I managed consisted of people from countries such as Japan, the United

Kingdom, and a few countries from Europe. In many cases, working with people from different cultural backgrounds requires close communication in order to avoid misunderstanding between the members. This kind of activity emphasizes the characteristics of each culture, and the members sometimes face the difficulties in understanding different cultures. I, as one of the Japanese members, felt that one's culture may also change its characteristics when encountering people from another culture, and it was remarkable especially among Japanese members. Perhaps this can be explained by the fact that Japan is considered to be a non-multicultural country, and when Japanese natives enter a multicultural environment, they might create new values within themselves in order to be adopted by society. Looking at this example, the behavior of Japanese people in this environment does not fit the existing stereotypical image of Japan and its culture.

From 1986 to 1999, the number of Japanese students who study abroad increased dramatically, and this number rose to 67,000 students in 2008 [OECD 2010:1]. Even though number has declined since 2004, where the number reached its highest with 83,000 students, it is still a considerably large number of students. Among those, 38,000 students aimed to study in the United States and Europe. However, despite the large number of students who have studies abroad, few studies on respective students' characteristics have taken place before the year 2000. Therefore, this thesis aims to find out "how a change in cultural situation can change the way a Japanese study-abroad students communicates".

This thesis will consist of 5 parts: an introduction, a study on cultural essentialism, a study on Japanese culture, a study of some real examples of Japanese study-abroad students, and a conclusion of the findings.

謝辞

本論文を書き始めるにあたり、4年次の春、私は自分の大学生活を振り返り、「何を本当に書きたいのか」を自問自答していました。ひとつの事柄を追及できない自分にとって、卒業論文という大学で得た知識の集大成とも言えるものが本当に書けるのだろうかというプレッシャーに押しつぶされそうになっていました。その時、自分がなぜ今のゼミを選んだのか考え、出した結論は「人について書きたい」というものでした。2年間の筑波大学での生活、それに1年間のイギリスへの留学は、自分にとって様々な人と対面する良い機会だったと思います。今まで出会ってきた先輩や仲間たち、そして先生の助けがあったからこそ、この卒業論文を書き終えることができました。

本論文の執筆にあたり、関根久雄先生には本当にお世話になりました。関根先生と相談できたことで、多くの不安がありながらも論文を書き始めることができ、また私の拙い文章で書かれた論文を最後まで見てくださいました。本当に心から感謝しています。さらに、本研究のためのアンケートを快く引き受けてくれた留学先でともに過ごした仲間たちにも感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。